
僕と魔術師と究極者

かずひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と魔術師と究極者

【NZコード】

N8755J

【作者名】

かずひこ

【あらすじ】

魔法が存在しないと想われた世界。この日、平穏な学園生活を送る青葉海斗の前に非日常の光景が広がっていた。存在しないと想われた魔術師と未知の存在『異界人』の対立。そんな非日常に呆然した海斗の前に現れた魔術師『エリス』。彼女から聞かされる異界人の使者との対立と、事の発端と言わた『究極者』とは一体……？シリアルス兼ねギャグ兼ね戦闘魔法、いろいろごちゃや混ぜ

第一話『魔術師』A

相変わらずの日常。

朝はいつも目覚まし時計鳴り渡り、カラスの鳴き声ばかりが響く通路で猛ダッシュ。

授業中では偶にふざけた友人のユーモアが炸裂しクラスが賑わう。昼休みになれば、売店の焼きそばパンを誰かにパシらせ、逆に誰かからパシられ。

下校時間を過ぎたと言つのに、校門で友人と談笑ばかりが続いて。帰りは夜になる。

街灯に照らされ、しかし静寂だけが纏つた道を歩く度に彼、青葉海あおばか斗いとはこう思うのだ。

何度も繰り返しに続いたこの日常に幸せを感じた瞬間こそ、自分は今平穀な日常の真っ直中に居るのだろう……と。

少なくとも、自分はこの日常に満足してこの日が毎日続けば良いとも考えている。

「は、はあ……？」

海斗の声が裏返る。

その日の夜は非日常的だった。まるで蜃気楼でも見てるかのようないつもの帰り道に視界が霞むようなハッキリとしない景色が映されている。

あれは一体何なんだ と頭を回すが拙い知識から出来る限り絞つて

みたが全く解らなく……それは未知の現象だった。

「つー?」

その時だ。ヒュルル、と。

何の前触れもなく、あの空間から力強い風音が響く。

肉眼でも捉えきれる衝撃が海斗に向かってきた為、本能的に身の危険を察知した。体を仰け反ると同時に、砂礫が飛び散る音が耳に入つた。

まさか、と後ろを振り向き、気がついた。

コンクリートで固められた壁が削られた事。

もし、あれを避けなければ海斗は死んでいたと事を。

この瞬間は悟つた時、海斗は自分の置かれている立場に愕然した。恐怖を感じる暇さえ無かつた。

「あら、外したわ……。」

そんなとき、霞んだ景色から、人影のような物が映ると甲高い声が聞こえてきた。トントン、ヒール靴を地面に響かせるような歩調音が近づく。

歪んだ景色から現れたのは、蒼い碧眼をした腰にまでかかる長い金色の女性だ。

肌の色は健康的で、目鼻立ちがはっきりとしている。

華奢な体格とお嬢様が着そうな白いワンピースが似合つた中々の美

人だ。

「しかし、よく考えたわね。"異界人"」

金髪の女が海斗に手を翳す。手の回りには黒い風が渦巻いている。
海斗は風を恐れる余りに、半歩、後ずさりした。

第一話『魔術師』A（後書き）

と、始まりました。小説投稿をするのは始めてになります。素人丸だしですが暇つぶし程度の作品にはなるよう今後も精進していく次第です。

それと、やけに短いのは仕様です。環境も含め作者（機種的な）の都合により一投稿1000文字以内までしか書けない為、一話に複数の区切りを入れてパート毎で投稿しております。

第一話「魔術師」B

徐々に風音が広がる。

掌までの大きさが、胸が隠れるほどの大さにまで膨れ上がる。女の碧眼は力強く細められ、獲物を捉えんばかりに鋭かつた。

「全く……一般人を装い不意を付こうとは、異界人は浅知恵しか働かないのかしら？」

右手を向けた儘、呆れたような声で言つもその表情は何処か愉しそうだった。

サド女…… そんな言葉が海斗の頭から浮かぶ。

「何か言つたらどうかしら、異界人さん？」

「い、異界人……な、何の事だ？」

女の言葉に動搖を見せる海斗。無論、自分が異界人だと思われているから動搖している。

けど、一般人なら思わず腰を抜かすが、海斗は充分すぎる程冷静。

彼女のみならず、とつさに自分でもつっこみたくなるほどに、

「とぼけたつて無駄ですわ……。全くあんな低レベルの魔獣を出しといて、飄々と外の空間から現れてくるんですもの。いくら、敵とは言え馬鹿も大概にしてほしいです。」

「は、はあ……？」

理解不能と、ため息を漏らす。
掌に集まる風音がそんなため息さえも遮ってくれた。

「あら、何か言いましたか？」

「何も言つていらない……」

「それにも、貴方。こんな状況に立たされているといつにやら
けに冷静よね。」

女は怪訝な目を浮かべた。

無論、海斗は恐怖を感じてれば言つてる意味も理解してない。
けど、だからこそ現状を打破しなければ、と冷静に考えたのだ。
そして、現状から逃れる手を探ろうと思考を回す。
唯一つ解つた事が一つだけ……極めて単純

「あんた……人違いしてないか？」

「足搔いたつて無駄だわ。私が張り巡らせた結界に一般人が入つて
くることはあり得ない。」

女は海斗が無実であるという証拠が無い為か一蹴した。
流石に海斗も脹ら脛を震わせながら思考を回しては回して。
本人を証拠と裏付ける物が複数思い浮かんだ。

「身分証明書を……」

「あら、それも変装の時に作つたなんですか？」

「学校に連絡して確認してくれれば……」

「なるほど他人に変装するのですか。で、本人は何処に隠したのよ！？」

「友人に証言を……」

「他人を洗脳したのね！？ やっぱり貴方は最低だわ！」

NOOOOOO!! と、心の中で何かが崩れた気がした。

女は「魔法」という都合の良い言葉ばかりを使い、海斗の無実の訴えを蹴り飛ばしたのだ。

涙を出したいのに、風のせいでの日が乾いていた。

第一話「魔術師」C

海斗は謎の存在「異界人」とは何なのか解らない。しかし、『異界人』だったら死ぬ可能性がある事は解っていた。

（そんなんで死ぬつもりはねえんだよ。）

心の中で泣き叫ぶが、当然女には通用しない。そつ思ひうと、瞬時に閃いた策で英断に出る。

「その結界が見えるのは多分、あんたも俺と”同じ”だからだと思う」

「同じ?」

彼女と同じ立場を演出した。こつすれば結界に入れた理由も適当に繋がる

「そう、同じ……。本来一般人には届かない力を認識できたって事は、あんたは俺と近い力を持っていたからかもしれない。」

「ええ、しかし……。」

淡々と冷静に語る海斗。女はどうちか、と困惑する。

「異界人というのが敵なら……、俺は違う。」

「それに、あんたも思つただろ。攻撃を仕掛けるならもつと良策があつたはず……と

「ええ、確かに。」

海斗の言葉に女は頷いた。

そもそもこんな高校生を装つてまで行く必要性が無いのだから、と

海斗は思考した。

「ああ、良策だ。別の場所から狙撃を仕掛けてくるとかあるいは背後から！」？

直後「背後から攻撃を」と頭が浮かんだ時。
彼女の背後に火炎音が聞こえる。あの曖昧だった蜃気楼が赤い煌めき。

火吹きのような音を上げながら、近づいていく。

ボオオ、と。

あれが何なのか海斗には解らない。

しかし、衝撃同様あんなのが直撃すると考えれば

「あら、そんな表情を浮かべてどうしたんですか？」

「馬鹿かお前は！？ 避ける！－！」

海斗の右手は彼女の肩にまで伸びた。

掌の風は海斗に不意を付かれたため消滅、驚くようて女の方も体勢を崩した。

海斗は彼女へ飛び込み地面へ伏せる為に飛び込むと、熱風が伝わってきた。

避けても蒸し焼きにされるほど暑い。

更に、上では夜景を灯すには充分すぎた強大な炎が、避けなければ一瞬で溶けていただろう。

『痛いわね……。服が汚れるじゃないの。』

はあ、と女はため息をこぼすが驚きの様子は無い。

「あれは炎獄系の異術。それも私でも感知出来ない速さ……。」

女の碧眼には過ぎ去つた炎が映し出されていた。

そして心当たりで在るようで、思い出すように思索した。

それは確かに心当たりだった。

「おいおい、俺を抜きで随分と”お熱い事”をしてるじゃねえかあ？』

と、そこで不意に蜃氣楼の方から男の声が響きわたる。

第一話「魔術師」D

「しかし、俺の攻撃を感じつとはねえ。」

その男は蜃氣楼から現れたのは声の印象と合致するほどの中年のイメージがあった。体格は一回りも大きいが何処か華奢であつて引き締まっている。

服装はグレーのYシャツに伸びきったネクタイ、ボタンは二つほど外れ胸が露出している。

顔に皺が目立つも堅苦しいよりは何処か慣れ慣れしそうな印象がある。

今風に髪をグレーに染めオールバック、俗に言つチョイ悪親父に該当する男だ。

「しかし癪だな。チエリーボーイ。光速を越えた俺のマグナムをこうもあつさりと避けられるとは」

「はつ？チエリーボーイ？」

睨みつける男に海斗も睨み返す。背中に隠した拳を震わせながら。強気を取り繕つておいて、実は怯えている。

そして違和感を感じる。魔術師でも無い海斗が光速と呼ばれた炎を事前に察知し避けた事。

「にしても、かつたりい。一般人を巻き込んであの『艶笑の暴風』

エリス・フォン・シュトレーゼの不意を突けば、一瞬で片を付けられるとthoughtたが。」

女の名前はエリス・フォン・シュトレーゼ。

魔術師の中では「妖艶の暴風」と恐れられるほど有名な風魔術の使い手。それ以上は異界人である男も知らない。しかしあう一つだけ。海斗が巻き込まれたのが必然的であると言うこと。

「やはり貴方でしたか……。しかし、驚きましたわ。炎獄術の破壊魔と恐れられた”ヴェーシャ・クロレッツ”ともあろうお方がこんな卑劣で愚劣な策に出るとは……。」

「やはり、地獄の異界者方は、程度の低い方しか居らっしゃらないのでしょうか？」

エリスのご挨拶は軽い揶揄から始まった。相手のキャラ男は『ヴェーシャ』と言う名前、彼女が海斗に勘違いしていた『異界人』。最初の攻撃の通り炎獄の使い手として恐れられる男変な形でエリスの勘違いが解消されたみたいだ。

「へつ、綺麗な薔薇には棘があるなんて言葉聞いたけど正しく、あんたに相応しい言葉だな。」

「しかし、冗談も止してほしい所だ。アンタのような奴と真っ正面で戦いを挑む奴なんてほんの一握り。その中の六割は命知らずな馬鹿なのは知れた事。」

男は冗談紛いにも言ひ。

妖艶の暴風エリスとは其れ程までに恐れられている存在。

「なら……貴方もその馬鹿の一人なのですね？」

「どうだろうな？それとも……熱い愛でも交わしながら、試してみるかい？」

「愛は抜きで……しかし上等ですわ。」

風と炎獄の火花

第一話「魔術師」 E

暗闇に包まれたような薄暗さが景色に広がった。
此が戦闘の予兆である」とは海斗でも理解できる

(逃げるなら今の内だ。)

踵の向きを変えて忍び足、隅の方を移動した。

「貴方は此處で見てて下さい。」

そこで、感づかれる。

此處を逃れようとした忍び足が、不意に聞こえたエリスの声で震え立つた。

「安心しな『チエリーボーイ』。こいつのが終わつたら、次はお前だ」

チエリーボーイと揶揄し、海斗は背筋を凍らせた。
すると、何時の間にか一人の構えが変わった。

「早い所、やつちまおうぜ。アンタの味がとても楽しみで仕方なくてよ。」

「あら、下品な事。戦うのでしたらもう少し品位をもつて頂きません事?」

「へつ、そうか? これから起きる事はもつと下品だつてのによ。」

「それもそうですわね……。結局、下品な血を飛ばし散らすのは、貴方”なのですから。」

「つるせえ女だなつ。チョリーボーイの次に、癪だぜえ!?」

その時、ヴェーシャの手元からは濃厚に溶かされた溶岩が出る。それが一瞬に消えると同時に、壁を強く叩きつけた殴打音がエリスの方に叩きつけられていた。赤く燃え上がった溶岩は溢れんばかりに飛び散り、凹んだ痕が生まれた。

此が地獄の炎を司る破壊魔ヴェーシャの力、炎術と呼ばれる物だつた。

光速を越える火炎。その威力は圧倒的で現代兵器よりも勝る地獄の火炎に相応しい威力。

「くつやりますわね。」

しかし、対するエリスも退かず。

寧ろ、予想以上の相手の力量にエリスの口元は悦ばしげに綻ぶ。

足下は青い線で描かれた異形な紋章。足下からは青く透き通つた隔壁が複数重なり。

幾重にも重ね、攻撃を防いだらしいがそれでも完全には防ぎ切れなかつたらしい。これがヴェーシャの火力と速度。

再び、相手は手元から炎獄を取り出すと一瞬の動作で飛ばす。

(流石に防御結界は持たないだろ)

しかし、エリスはその場を動かず。

手を翳す、無数の異形の紋章が現れ神風と為に風を斬る音が無数。宙からは粉のように炎獄が飛び散った。

「おつかねえおつかねえ、護つただけでなく複数にも分けて俺の連撃を破碎するとはな。そして空間の風を使って光速を感知か。流石の俺のマグナムもすぐに萎んじまう」

笑っているが、相手を見下したような物言い。

エリスの魔法は炎獄の攻撃性は劣る物の、力強い風圧を駆使した風魔法。

その速度や範囲性は炎獄よりも優れていた。

第一話「魔術師」F

「あら、 その程度でへばつてしまひのですか？ 戦いは此からと言いますのに」

なんて女は笑つて。

いつの間にか異形の陣が宙に無数、 風の勢いが強まる。 対峙する男は相変わらず佇むまま。

両足の幅を広げエリスは再び手を繕した。 そしてこゝ紡ぐ。 「ゆけ」 そんな一言と同時、

無数の円形から波のよつに膨らむ透明色が現れた。

ヴェーシャへ行く度、 風音の勢いは増すばかり。

対するヴェーシャに然したる狼狽は無く、 その時口元が綻んだ。 よつやく動き始めたと、 大胆に体を仰け反らせその勢いで大爆転宙に一回転した。

ヴェーシャは着地時に下がる左足がバネのよつに地面を蹴り10m程の宙を飛び越える。

破碎音と共にコンクリートの砂礫が飛び散り辺り一面を煙が包んだ。 無論、 攻撃は避けられた。

エリスから数10歩離れた場所。 宙に舞うヴェーシャがエリスに急降下する。

途中で炎獄が揺らめく。 重力と全体重を駆使してまで、 突き抜ける素早さで加速する。

光速を越えた炎獄が完封されたと解れば、 まるで愉快そうに聞合いを詰めてきたらしい。

こんな状況にたたされたといつにても関わらず海斗の感覚は大体を捉えていた。

しかし、 その時も女の笑みは変わらずだ。

「察知が早いわね。しかし、近距離も嗜んでいましてよ。」

もう目の前にヴォーサが居る所で、女の周りに仕掛けられた異形の陣が淡く光った。

周りから暴風が吹き荒れる。小さな竜巻のように何千もの数で渦巻まく。

男の急降下は更に加速し続け、炎に纏われた拳を強く握りしめ大きく降りあげた

「何を出すかと思えば、ちんけな木枯らしか！ 嬢ちゃん、あめえよー！」

周りには、加速を続けたヴォーサ別の風音が高鳴っていた。そして振りあげた拳を振り下げる時、風を突き抜けるような甲高い音響を奏でた。その勢いに難無くと小さな竜巻を貫かれる。確かにあれだけの勢いをつけたヴォーサにとって、エリスのそれはチンケな木枯らしも同然だつたのだ。

「くつ、何だい何だいもつ終わり……？」

直後の粉碎音なつた直後、エリスが居た場所には当然の如く もはや穴の次元を越えた巨大なへこみが現れる。

一面に広がつたコンクリートも此では湾曲に反られた瓦礫の集まり

としてただ飛び散つたばかりで、此を喰らえば死ぬのは当然。寧ろ、肉片が残るかさえ儘ならない程だ。しかし、竜巻を破つたあの瞬間、ヴェーシャの声と勢いは確かに「躊躇」があつた。

第一話「魔術師」G

実はヴューシャが躊躇っていたのには理由があつた。幾重にも重なつた旋毛線を破つた直後、ヴューシャの視界にエリスの姿は存在しなかつた。

それでは違和感がある。何故ならば、小さな竜巻から彼女が逃げる隙と言うのは何處にも無かつたからだ。

（けれど現に起きた事だ。どう判断すべきか。）

この違和感から数秒も満たない頃、ヴューシャの長年の経験が「警戒続行」と判断した。

しかし、気づくのはあまりにも遅すぎた。

ヴューシャに背後から、明確な強大な風音^{ほうおん}が複数、迫つていた。チツ、と軽く舌打ちし踵の向きを変えると手元から溢れんばかりの獄炎が強大な暴風から護るが。

「クツ……。」

辛うじて防げた。

しかし、その場では痛みを堪えるヴューシャの声と右肩の血しぶきが重なつていた。

気づかぬ内に”背後”を取られていたのだった。

「先手を取られたか……。愛を語り合つのはこれからってのに、こんな形で女に振られるとはな。」

なんて言ひ冗談と苦笑いが聞こえるが、顔は笑っていない。寧ろ、してやられたと言わんばかりに目元をつり上げていた。ヴェーシャの背後には中距離間隔でエリスが居た。

「はあっはあっ、これでしとめたと思いましたのに……。」

息切れをしながらエリスは言ひ。どうやら余程体力を消費したらしい。

（まさか、避けられるとは……。）

あの時、エリスにはヴェーシャをしとめる確信があった。

隅で静観し続けた海斗でも、何が起きていたのか安易に説明が出来る。

実は彼女の竜巻とヴェーシャの火拳が衝突する際、異形の紋章はもう一つ展開されていた。

場所は空中を急降下した”ヴェーシャの背後に”。

そして竜巻が突き破った直後、

躊躇うヴェーシャの背後にエリスは急に出現し、黒い風を手に纏わせ複数放つたのだ。

それは転移魔術式と呼ばれる物だつた。数m程の移動を空間を越え

て瞬間移動を可能とする魔法術式。

魔術師の間では全般的に有名な魔術だが、範囲も狭く移動手段でさえあまり実用的では無い為、戦闘でさえも使われない物。エリスはそれを攻めの一手中に使っていたのだ。

「ちつ、こんな局面で転移魔法を使いやがったか。内部と外部の視界を遮断する竜巻の性質を利用して、竜巻の中にお前が居ると思いこませた訳か。」

「だが……嬢ちゃん。失敗したようだな……俺を一撃で倒す為にあれだけの魔力を費やしやがって。」

第一話「魔術師」H

エリスが出した魔術式は強大な風圧で空間圧迫し、相手をそのまま挟み潰す為の高度な魔術式だった。呪文詠唱に時間はかかるが、彼女の才能はそれを補うが。その消費量は常人では耐えきれない程のあまりにも激しい物だった。

「はあっ……はあっ……。貴方も人の事を言えませんけどね。」

「言つてくれるねえ。しかし、それは第一ラウンドに入んなきゃ解らないこつたる?」

「それも……そうですね。」

息を強く吹き込むように、ヴァーニャは笑うと、鸚鵡返しにエリスも笑つて返した。

血しぶきが出る程の手負いでも笑うだけの余裕はあるみたいで。対する息切れが激しかったエリスも堪えるように治まるが、ただの強がりでしかない。

そんなどき、再び両者は構え。

戦闘態勢に。

入るはずだった。

「が、今日は退かせて貰うぜ。そこの『魔術師』と連戦すんのは面倒だからな」

「あら、逃げるつもり?」

「逃げるんじやねえ。」

魔術師といつ部分を強調させながら海斗に視線を合わせ、紅蓮の炎

に包まれたままヴォーシャは消え去った。海斗が魔術師であると言ふ勘違いが不幸中の幸いだ。

「ちょっと待ちなつ

。

手を伸ばすと、前足を踏み込むエリスが何の拍子もなく片膝を付いた。

多量の魔力消費によつて体よろついたらしい。

「おー、大丈夫か?!

体勢を崩す女を見れば海斗がとつそに歩み寄る。

(今なら、逃げられたんだが……。)

チャンスを取り逃がした自分に呆れ返つていた。

「はあつ……はあつ……」れしきの事、大丈夫です」

「ちょっと待て救急車を

「馬鹿言わないで下さい、こんな状態で救急車なんてよべ……ますか?」

携帯を取り出そうとしたときにエリスは声を荒げた。

携帯をしまおうとした時、不意に海斗は呆然した。

コンクリート灰黒い砂礫は散らばつていて、虫にかじられたように電柱や壁は所々削れていて。

一部では鮮血が飛び散っている。

(こんなのが有り得ない……。)

『氣づくまでは”生き残りう”と無意識に動いていた。ヴェーシャとエリスの戦闘時も降り懸かる余波に対して電柱を壁にしたり、自慢の運動神経を駆使して無傷を保つたり。

普通なら、冷静で居られるはずもないのだが……

「ねえ、貴方。回復術は使えないかしら。」

「……」

「ねえ……」

「はあ……」

「ねえつてば！？」

第一話「魔術師」Ⅰ

「な、何だよー?」

更に驚愕。耳元に響いた女の声に、素早く首を振り向いた。

「回復の魔術は使えないのかしら?」

「は?」

呆然としていたのか。僅かに女の質問に對して思考の機能が遅れた。無論、エリスは海斗が魔法使いだと勘違いしている。

（此處はただの高校生だと話した方が良い……のか？）

「いや……俺は魔法使えないし。」

「あら、てっきり魔術師かと思つたのだけれど。”異術者”だったのね。」

「いや……そうでもなくて」

「じゃあ、何なのよ?」

「ただの高校生です」

海斗の勇断、きつぱりと断言した。

「高校生といつもで、本当は何の魔術師かしり?」

「はあ?」

「見苦しいわね。白を切るつもりならそのまままで良いけれど。」

一蹴するかのようになっサリと答えた。

「それより、何処か休憩出来る場所は無いのかしら?」

「解らない……」

「そうだ。貴方の家はどちらかしら。」

一瞬、海斗の目が点になる。

(何を言つてゐるんだこいつは)

「あのな。敵か味方か解らない相手の家に泊まるつもりなのか?」

「違うわよ。私もそこまで馬鹿じゃないわ」

「いや、馬鹿だ！」

海斗は一緒に泊まるところの言葉を聞いて動搖を隠しきれない。

「それだったら、貴方も馬鹿よ。敵か味方かさえ解らない私を助けてなんですから」

「くつ。」

舌打ち紛いに、悔しそうな表情を浮かべる。

彼女に口で圧倒されていた。

「だがな……。」

「勿論、ただとは言わないわ。貴方のルールには従うし、貴方の生活の邪魔をしたりはしない」

「……はあ

(結局何を言つても無駄そうだな。)

諦めがちにため息をはいた。

「それで答えは?」

「迷惑を本当にかけないんだな……」

「ええ、当然でしょ?」

食いつく海斗にエリスの壁眼が煌めく。

何を言つても無駄だと解れば、返事は一つしかなかつたのだ。

「…………解つた。」

「フフフ。交渉成立ね。まずは動けない私を動かして頂戴

「…………はあ。」

エリスの前に立ち、海斗はしゃがんだ。

細い両腕が海斗の胸部を巻くと、太股を支え彼女を抱えあげた。

「所で…………随分と荒れたがどうなるんだ」

「さあ？」

「さあつて…………」

「フフフ、大丈夫よ。元の姿に戻るわ」

「それも魔法の力か」

「何言つてるのよ。知つてる癖に

「知らん」

「またトボケちゃつて。」

「違ううううう！」

こつじて 海斗の非日常的な生活の幕が開いた。

第一話「魔術師」Ⅰ（後書き）

完

長くなりましたが、一話が終わりました！――

第一話『異界人』A

平日の朝。相変わらず家具の少ない狭い空間で青葉海斗の朝が始まった。

小さな食パンを片手に一口、パクリと噛んで制服に着替えると、すぐ様古びたアパートを出るのだった。

両親は別の街に住んでいる。これから通う公立高校『帝律高校』に通うにはどうしても通行料が掛かるとの事で、学校に近いアパートを借りて一人暮らしをしているのだ。

「少し遅れそうだなあ」

いつも通りの道を小走りした。

公立高校『帝律学園』は名門校と言う程では無いが、不評をあまり聞かない事から県内の受験生から人気がある学校らしい。だからと言つて、不良が居ないと言えば嘘になる。というか、海斗もその不良の一人と言われている。別にチンピラの意味で不良って訳ではない。

居眠りと言つた授業の態度の悪さと、テストの点数の低さを含めて何かと頭を抱えられているのだ。無論、人付き合いもそうだ。友人の数多くは、補習を受けるか受けないかの境界線を共にさまよつている同志。簡単に済ませるなら類友である。

「よう、海斗」

他人から声をかけられたのは2・Aと掛けられた教室に入った瞬間

だつた。

扉を開けた海斗に近づくと乱雑に制服を着こなした、茶髪の男が姿を現した。

身長は彼と差ほど変わらないが、相手の方が高く髪も立っている。そして制服のボタンを開いたまま、陽気な笑顔が浮かんでいた。

男の名前は杉村蓮司、高校生活の中で海斗と一緒に付き合いの長い悪友の一人だ。

「蓮司……今日は早いんだな」

感心したように海斗は言った。自分よりも遅く遅刻をする常習犯、蓮司が自分の目の前に現れたのはあまりにも珍しい事だからだ。

「杉村君が遅刻しないなんて、本当に珍しいよね」

と、横から現れたのは肩にまで伸びた黒いセミロングの女性。蓮司とは対照的に埃一つすら見あたらない清楚に整えられた制服。スカートは学校の規則通りに膝の上辺りにまで伸びている。

名前は桜井愛海。

海斗や蓮司と親しい友人の一人だが、彼らと違つて成績は一桁は必ずランクインする程の秀才。

クラスメイトから親しまれ誰にでも話しかける事から、影では理想的な女性の一人として名前が上がる事がちらほら。

「そんなん珍しいのかよ」

「うん、珍しいし。なんか詰まらない」

桜井は断言するように微笑んだ。

「詰められない？」

「俺、悪いことしちゃったかな？」

「やれだったら、いつかしてやるだろ。」

海斗は断固とした。

第一話「異界人」B

「俺をからかっているのか？」

「いや、ありのままを言つたまでだ」

「こりゃ手厳しいぜと、両手を広げる連司。

いつも三人でこうして他愛の無い会話で笑いあつたりするのが海斗の知つている平穏だった。

「まあ珍しいと言えば青葉君もそうだよね……。いつもならホームルーム20分前に来るけど今日は五分前くらい。というかギリギリじゃないの。」

「うつして珍しいことが重なると、台風でも吹りそうだね。」

愛海は口元に人指し指を添え、口を小さく尖らせた。

そんな言葉を聞けば海斗は苦笑いを浮かべるしか無かつたのだ。

お馴染みの鐘の音が響くと、生徒一同は席に着く。

海斗の席は窓側の奥の方、教師に指定されにくい特等席の一つだ。そこに腰を掛け頬杖を付きながら外の景色を呆然と眺めた。

扉をゆっくりと引きずる音が一回した。前の扉はまだ開いている。

茶色いスーツを来たネクタイを下げる男が入ってきた。

毎度恒例の挨拶を済ませるが、どうも今日のホームルームはいつもと違っていた。

「実は、転校生が来てるんだよなあ。」

簡単そうに担任の教員 氷川淳^{ひかわ あつし}が苦笑いを浮かべて言うと、教室

が一瞬ざわめいた。

随分前から予定が入つてたらしいが、今氷川の口から告げられるまでは誰も知らなかつたのだ。

「まあ良いや、入つてこいよ~」

軽い口振りで言う氷川。

扉を引きずる一回目の音が響くと、教壇に現れたのは……。

「皆さんとこれから同じ部屋でお世話になります。エリス・フォン・シコトレーゼといたします。私のことはエリスと読んでくださいね。」

と律儀にお辞儀をして微笑む女。当然の如くあのエリスだった。

しかし、流石と詰つべきか桜井愛海。

彼女が予見した『台風』は本当に訪れたのだ。

第一話『異界人』 C

だろうな。と呟く海斗はエリスがこの学校に来ることを事前に知らなかつた。

しかし、彼女がここまで来た理由を聞かされれば大体の心当たりが出来てしまつからだ。

それは数時間前、まだ夜だつた頃に至る。

あの惨劇の場から彼女を自宅にまで持ち運ぶには、簡単な事だつた。単に海斗が力持ちだつたというよりも、エリスの体があまりにも軽かつた為、自宅まで運ぶには差ほど労力は掛からなくて。

「青葉海斗……ねえ。聞いたこと無い名前だわ」

その頃、自己紹介を終えた二人が会話を交わしていた。

海斗はキツチンで晩ご飯を作り、エリスは卓袱台と煎餅布団が敷かれた狭い部屋で渋々と横になる。

最初は「男の臭いがするわ……」と怪訝な眼差しを向け、海斗の指示を拒み続けていたが、

それでも寒い風に当たつて寝るのは嫌だつたため、今は我慢するようになんかをしかめ布団の中に潜り込んでいる。

「それで、あのヴェーシャって男が異界人なのか。」

彼女の方へ振り向かず、レタスを刻みながら海斗は言つた。

「本当に貴方、魔術師にしては知識が拙いわね。ええ、貴方の言つ

通り、あれは異界人でもちよつと曲者の部類に入る者だわ

「だから魔術師じゃないって言つてるんだが……」

「じゃあ、あの時言つた『私と同じ立場』つていうのは何だつたの

かしら」「

「あれは、あの状況から逃れる為に切羽詰まつてついた嘘だ。」

「今貴方が嘘ついたと言つ発言そのものが、切羽詰まつてついた嘘でしか思えないわ」

はあ、とため息を吐きながら。やつぱり海斗が何を言つた所で無駄らしい。

海斗が魔術師であることは決定事項なんだろう。

「まあ良いわ……身分を隠す魔術師なんて沢山居るからね。」

「それは当然だろ。自分は魔術師だ、なんて言つてる奴は頭の中にお花畠が咲いてる奴としか思われない。」

「御花畠が咲いてた方がある意味良かつたのかもしませんね……。」

「

意味深に言つエリス。現状をわからない海斗には何を言つているのかさつぱりだ。

「で……異界人つて何なんだ。」

彼女の方へ近づき海斗は発した。

「読んで字の如く「異界の魔術師」ですわ。」

「異界の魔術師ねえ……。要するに異世界の魔術師と?」

「ええ簡単に言つなら、そうだわ。」

と、簡潔に答えた所で女の説明は続いた。

「知つての通り、異世界は二つ存在するわ。下界と上界……天国と地獄と言つた方が正しいかしら。」

第一話『異界人』D

「要するに異界人は天使と悪魔か。」

「そう呼ばれているだけで本当はそんなのは存在しない。」

説明を聞いて素朴に思つた疑問をエリスは遮ると視線が机の隣にある紙切れを見やる。新聞紙に混在されたチラシだ。それに手を伸ばすと懐からペンを取り出す。スースと三つの横線を引き海斗に説明するのだ。

「下界と上界も人が住む世界と全く変わらないわ。この線で説明するなら、一階に下界があつて三階に上階があつて、それだけよ。」「確かに彼らは天使や悪魔つて呼ばれていたわ。けど用いる力が異なるだけでそれ以外は我々と変わらない。だから異界人つて訳。」「へえ、随分と単純に説明するんだな。」「その方が解りやすいでしょう?」

地獄と天界、そしてこの世界も差ほど変わらなく。ただ部屋の形が違うように、その世界観も各々に異なつていて。しかし、それだけの説明じゃ足りない。

「で、何でその異界人とあんたが対立してたんだ。」

「『究極者』よ。」

「あ?」

裏变える声で海斗は首を傾げた

「世界の秩序を束ねる力『究極のクリスタル』を扱う者よ。」

「……」

「『めんなさい。貴方の認識で言つなら、神の力といった方が解りやすいわね』

「最初からそう説明してくれ。で、その神様がどうなつたんだ」

「一年程も前、それは『破壊』されたのよ。」

「破壊……だつて？」

「そう、起きないと思われた『神殺し』が発生したのよ。」

「神と呼ばれる力、究極者と究極クリスタルの消滅。そして『神殺し』。全ての事の発端はそこからだつた。」

「神殺しについては私もよく解らない。けれど究極者が居なくなつてから、世界と世界の間にある秩序は崩落した」

「そのことで本来なら禁じられた『別世界への移動』が相次いで、無法にこつちの世界へ侵入した異界人が多くなつた訳。」

「世界に入り込むくらいなら、どうでもいいんぢやないか？」

「そもそも行かないのよ。此処からは込み入つた話になるんだけれどね。」

複雜そうな顔をすると、今度は余白に複數の丸を書いた。

「信仰が複數あるように、魔術の発展の為、異世界の組織と共に同盟を結んだ組織が複數あるのよ。」

勢力は大まかに分けて四つ。まあ長くなるし勢力の説明は省くわね。」

「けれど、究極者の消失から組織の長の間で大論争。同盟はそれがきっかけで破綻し、戦争にまで勃発したわ。」

「けど、大変なのがこの対立のせいで四つの勢力がこの現界で衝突してゐるという事よ。」

第一話『魔術師』E

厳密に言えば魔術組織団体と呼ばれる物。

その大きさは組織によって様々だ。小さければとことん小さく、大きければ国規模で存在する。

究極者消失前までは有力な魔術組織団体が異界者の組織団体と、魔法に於ける技術発展に向け、情報貿易を目的に頻繁にコンタクトを取つていたらしい。

魔術組織活動の名目で行われた異界人との交流は、正規の方法で行われた為、当時の究極者の秩序に触れる事はなかつたみたいだ。しかし、究極者消失した結果、此まであつた友好から原則的に禁則された異界移動も破れ去り。

これから先はエリスの説明通り。

そんな所で海斗の作った料理が出来上がつた。
食器皿一枚の上に此でもかと山のように盛り付けたのは夜食では定番な焼きそばである。

海斗は両腕を皿一枚で塞がれたまま、近くの卓袱台の上に運んだ
ご飯出来たぞ、とは言わず変わりに卓袱台の上から濃厚なソースが
漂つた。

案の定、エリスはその臭いを嗅ぎついてくれた。

布団からひょっこりと日の出のように顔を表し、山のように盛り付けられた炭水化物を見据える。

「なにこれ?」と、予想以上の量に驚愕。

しかし、先の戦闘で溜まつた疲労や狭い部屋から漂うソースの濃厚

な香りが彼女の食欲を濯ぐあまりで、不意に小さな腹の虫が鳴った。頬を火照らせながら、田の前の焼きそばに素早く手を伸ばした。

「それで……何でこの世界なんだよ。」

と下品にも口を動かしながら海斗は言った。

品位を持てと言わんばかりの鋭い視線を向けられるが海斗自身は気に掛けていない。

「コホン、簡単に説明するとさつきの説明のように現界が1階と3階の間『2階』にあるからだわ。」

炭水化物を咀嚼し終えると小さな咳払いをしてエリスは言った。

現界は下界と上界に挟まれた世界。言い換えるなら上界と下界の道を繋ぐ『橋』である。

そのため、戦力を蓄えるには現界という領地は尤も安全で強力な場所らしい。

上界や下界と違つて、現界は魔法を知らない人間が多い。そんな人間に紛れながら潜伏する異界人が多いらしいのだ。

「しかし、幾ら現界が便利な場とは言え現界で対立が発生してのもまた事実なのよ。」

「クソッタレな都合だな。」

そつ返す頃には焼きそばは完食。炭水化物が入ったお陰か海斗の思考は多少冴えていた。

「要するに、あいつらはかなり得してるんだろう？魔法すらも知らない都市の影で人間を装いながらな。」

「そうね。これ以上は推測になるから何も言わないけど、彼らが得をしていて現界が格好の舞台だとなつてはいることは事実よ。」

下からにも上からにもスポットライトを浴びた世界。此だけ注目されているのにも関わらず、その脚光を浴びた一般人は本人揃みだ。それでも海斗のような例外を除けば、そんな諸事情に関わった人間は舞台場の脚光を浴びるどころか、血を飛び散らす羽目になつていただろう。そんなのも言いぐるめて、此はスポットライトじゃなくてブラックライトも同然だつた。

「そんなお前は、この世界の素つ晴らしい魔術組織の勢力に荷担してると?」

海斗は皮肉を込めてオーバーに言つ。こんな諸事情に巻き込まれるのに反吐が出ていた。

「いいえ、私の対立は違つわね。」
「じゃあ、何なんだ。愉快そうに変態男と踊つたあれは……。」
「あれは、対立があつたからじゃないわよ。あつちから喧嘩を売つてきたから買ったまでよ。」「

ヴェーラの事については一言で返すと、そうかい、と海斗は詰ま

らなそうに言った。

「最近新聞の記事で見かけた『行方不明事件』知っているかしら？」

「え……？ ああ、知ってるけど」

「その八割は異界人と魔術師の戦闘に巻き込まれて死んだ一般人だ
と思った方が良いわ。」

確かに、此処最近行方不明事件が起きているのは事実だった。

特に海斗が住むこの町では……報道はされてないものの何人か行方
不明なった事が学校での会話で持ち上げられていた。

「私が此処に来たのは、此の近辺に発生する行方不明事件があまり
にも多かった事。」

「私は此処に沢山の異界人が居ると睨んで来た訳。組織の命令とか
じやなくて、私自身の単独行動でね」

その日の晩は彼女の一句で締めくくられた。

エリスの言葉を何処まで信用して良いか、海斗には解らなかつた。

けれど、言い分からして現状と辻褄が合つのは事実だ。

彼女が海斗を見つけた時、仲間の可能性を考慮しなかつたのも独断
行動を小さく裏付けているし。

また此までの行方不明事件の原因が異界人との戦闘の余波で発生し
たというのも納得の行く理だ。

だから、海斗は理解した。

日常の裏に潜む非日常の実態について、
そして彼女が此の町に『居座り続ける』といつ事も……。

キンコーンカンコーン。鐘の音が響いた時、ふと海斗の意識が蘇つ
た。

第一話『魔術師』G

日が沈み掛ける頃、狭いちゃぶ台の上に両腕を乗せ疲れ果てたよう
にエリスは憤りを感じていた。

自己紹介を終えたあれから、エリスは教員の氷川淳に呼ばれそれま
では面談室に居た。

初日登校は学校の重要事項や取り扱っている教材についての説明を
受ける為の日だった為、

朝礼の時に顔を出したのは飽くまでついでだったのだ。

「お疲れだな。」

ちゃぶ台の上にお茶を入れて、海斗は苦笑いした。

自己紹介の直後、美人が急に現れたとの事で男子勢の歓声が響いた
が恐らくその事何じやないかと思索していた。

「全く腹が立つわね。あの教師は……。」

「教師つて氷川の事か。」

「ええ、そうですわ！ あの無気力そつな若造ですー。」

エリスは卓袱台を両腕で叩きつけた。

氷川淳、一年A組の担任年齢は28歳で担当科目は数学と理科の両
方。

年代的に生徒と近くお気楽な振る舞いから何処か親近感がある事から、

クラスの女子の間では「担任になつてほしい教師ベスト3」に入るほど随分と人気のある教師だが。

一体、面談の際に氷川とエリスの間に何が在つたのだろうか。

「急に「めんどくせー」なんて言つて、説明するときは小難しい言葉並べたり。氷川は意味が分からぬわね。」

「けど、あれが氷川の持ち味だからなあ。」

しかしエリスは違う。

彼女にとつて氷川淳教員の説明は意味不明、存在そのものが謎だつた。初日早々から「めんどくせえ」と言葉を投げかけられ、そうかと思えば小難しい言葉ばかりを一時間も並べて説明をする。普通の人間ならチンパンカンパンだ。無気力そうだが堅苦しさ兼ね備えた異様性、あれがエリスにとつて気に食わないらしい。

しかし、憤りを感じた理由はそれでは無いみたいだ。

「そういう問題じゃないの。私は、まだ賢いから彼の言つてる事には理解できたのよ」

「自分で賢いって……で、何なんだよ。」

「問題なのは、あいつの説明内容よ。あれだけ小難しい言葉を並べてるんだから、余程複雑な話なんだうつて思つたんだけど。よく聞いてみたら、違うかったのよ」

「違うって?」

「何を言つてたと思う? あいつ説明内容忘れたからつて誤魔化す

為に「猿の生態系」について一時間もほざいてただけだったのよ？

！

「プツ……。」

海斗の笑いが込みあがる。

第一話「異界人」H

エリスの表情が強ばるのは百も承知だが、抑えようとしていた笑いがどうしても止まらない。

だからドン、と音が鳴った。エリスの両腕が卓袱台を叩きつける。湯呑みに灌がれたお茶や食器などが微かに揺れていた。

「今、笑ったわね。」

「いや……。」

「絶対笑ったわ！？ 私の何が面白いのよ？！」

「違う、違う……。それが『氷川』なんだよ。」

海斗は笑いを出来るだけ堪えながら言つが、エリスの拳が上がるのを無意識に恐れ卓袱台から遠ざかっていた。
ようやくエリスの様子が多少落ち着くとこりを見ると再び卓袱台に近づいて、

「それが、氷川ってどうじうことよ？」

「要するにそういう奴なんだよ。数学の授業でも『一乗しても0を越えない虚数』を『妄想に妄想を重ねても決して、現実を越えない中一病』と言う程だからな。」

「恐らくお前のことだろう、『猿の説明』に首を突っ込めなかつたんだろ？」

「ええ、あれだけ語られたら……突っ込むどころかドン引きですもん。」

「ああいう奴なんだ、怒る気持ちも解るが慣れるしかない。」

「……。」

エリスの沈黙が続いた。海斗は言いたいことを済ませてテレビのリモコンに手を伸ばすと、

「しかし、同じ学校で同じクラスだつたとはね。」

「何か不満でも？」

「不満も何も当然だ。飯と寝る場所を提供するだけで、俺はそれ以上日常生活に関わるな、と言つた筈だぞ。」

「それは仕方ないじやないの。貴方が来る前から転校は決まってたし、それに私だつて貴方と同じクラスだつて思いもしなかつたもの。」

「神様。いや『究極者』つていつのは本当に気まぐれだな。」

「確かに、まあ今は居ないけどね。」

海斗は大きくため息を吐くと、隣の布団の中に潜り込もうとする

「おやすみなさい。」「おじおじ、明日からは自分の布団を用意するつて言つたじやねえか！？」

「『じめんなさいね。教材買つてたら残りが50円しか無かつたのよ。』

「

エリスは布団に潜り込んだまま、上目使いをして海斗を見て。下からタオルケット、毛布、掛け布団を三重だ。昨日使つたタオル

ケットもエリスの物になっていた。

「おい、タオルケット一枚で寝ると?」

「あら、何なら一緒に寝る?」

「いや、もつと無理だ。」

「なら、お休みなさい。」

「だから返せって!」

あれから数時間、寒い夜をタオルケット一枚で過ごした男子高校生が居た。

それが誰なのかは言つまでもない。

この時間の授業は些か異様で、なかなか気まずかった。

男子は盛り上がり、女子の多数は頬を真っ赤に染めながら気まずい表情を浮かべている。

無論、その中で青葉海斗はそのどちらにも該当せず、エリス・フオン・シユトレーゼは「最低」と呟きながらも、その様子は後者に該当していた。

そして、教壇の前に立つ男『氷川 淳』だ。

彼こそ、この女子と男子のジグザグなテンションの起因となつた張本人である。

その後ろは際どく描写された本の表紙が複数。参考資料という名目で張られていた。

しかし、何故このような事が起きたのか。

そう、事の発端は授業開始時、氷川が教壇に入ると複数のエロ本を黒板に張り付け『保険体育の授業を行う』と言つた事から始まった。無論、本は18禁指定物ではない。然し、そこにエロがあるという事実に男子の歓声は高まっていた。

無論、言つまでもなく女子はその対照的だ。

けれど氷川は理科、数学の担当の筈。授業担当は溝淵教諭が来る予定ではないのかと驚きを隠し切れない。けれど、この日に限つて溝淵は風邪で休暇を取り、副担任の氷川が授業を執り行うと異例の事態を知れば、呆然よりも先に黒板の描写物に視線がいって赤面する

しか無かつたのだ。

起立、礼、着席が済むと授業は執り行われるが、

「もう既に別の意味で起立している奴は、ずっとし続ける。そこで着席したら負けだ。何故ならば、それが男と言つものだからだ。」

女子が選ぶ教師にしたいランキングベスト?の株は、早速この瞬間から暴落しつつある。

下ネタが炸裂するのだから仕方ない、純情系の桜井が困り果てた儘、頬杖をついている。一方のエリスは耐えきれないのか恥ずかしがつた鬼の形相を浮かべ握った拳を震わせていた。

そして、黒板を叩きつける音が響いた。

そこには普段見せない無気力な表情が鋭く真剣な表情に変わった氷川の姿が。

端から見たら、その表情に時めく女性も少なくは無いだろう。

しかし、それが保健体育の授業の為に用いられたと考えれば苦笑い所か失笑するしか無い。

そこで早速、誰かの右手が上がっていた。

海斗はそれに視線を向けると案の定と呴いた。その目先に杉守連司は氷川に食いついていた。

「先生、なら着席するにはどうしたら良いでしょうか。」

「ふつう、着席は愛する相手に礼儀良くお辞儀をした後だろ。」

「先生、お辞儀をする相手が居ません。
なら、起立をしないほうが無難だ。」

連司は女性陣が多数居ても、堂々と構える儘で。女性陣に紛れた男性陣はその勇姿に惹かれ便乗したと/or/

「先生、この授業の意味について教えてください。」

「あー、成長期の性に対する意識についての授業だよな。溝淵先生に頼まれた授業をやっている。といづか前の授業で聞いてなかつたのか?」

「いや、明らかにフザケてるだろ。何で保健体育の授業でエロ本持ち込むんだよ。」

「性の意識一つたらそっちの方が手つとり早いだろ?」

海斗が立ち上がりても、氷川は無気力そつと答えると一部の男性勢は「そりゃそうだー」と便乗して、

「何が、どう手つとり早いのか説明してほしくらいです。」

「教科書の絵は単調的かと思えば、急に露骨になつたりするだろ?先生が丁度良いように説明できるように持つてきただから安心してくれ」

「そんなんで説明するな。安心も糞も俺はあなたの思考回路がイカレすぎていて安心できないわ。」

「ネチネチネチネチ、つるせえな。良いじゃねえかよ、18禁じゃねえんだしさ。」

「良くない。」

「青葉君は寛大になるべきだ。じゃないと卒業できなこままだぞ、

いろんな意味で。」

「勝手に決めつけるな。」

一人の男子高校生の童貞疑惑がチラツかれた所で、そこで口論の幕は閉じられた。

複数の視線が窓側の隅に向かると、あれだけ威勢が急に退勢。海斗が席にしゃがみ込んだ瞬間、男子高校生の歓声と共に氷川流の本当は教えちゃいけない保健体育が始まった。

保健体育は懲り懲りだ。

「氷川にエロを語らせるのはNGだ……。」

昼休み、授業態度の問題について職員室に説教を受けてからようやく教室に戻った海斗は重いため息を吐いて自分の席に戻ろうとした。と、そこで海斗の席で佇んでいた桜井愛海が二コリと微笑んで近づいた。

「青葉君、今日は色々災難だね。」

「ああ、災難と言えば一昨日からそうだったな。」

災難と言葉を聞けば苦笑いを浮かべ。

同じ習慣を何度も繰り返すと人の体感時間は過去よりも短くなると聞いたことはあるだろうが、逆の経験をしてその通りだろう。少なくとも、あのエリス・フォン・シュトレーゼが来てからは

「もしかして、あの転校生の事？」

と、そこで桜井が微笑みを浮かべる
海斗の背筋が凍った。

高校に入学してから桜井とは付き合いが無い海斗には解る。彼女の勘の鋭さは度を超えている。

例えば放課後にトントン、と足踏みしながらリズムを取つている男子が居たとする。

普通の人、つまり海斗なら何の曲のリズムを取つているのか男子に尋ねるが、比べて桜井はリズムを聞いただけでそれが何の曲なのかすぐに当ててしまふ程、差があるのだ。

そして勘の鋭さだけじゃない。その着眼点や推察力を兼ね備えている。

そんな彼女を敵に回したくないと感じたのは数知れず。

「つていうか、何で転校生なんだよ。」

「飽くまで、そんな気がしただけだよ。」

と、桜井の視線が海斗からエリスの席へ。

周りには複数の人影が集まつていて、さつきから教室がザワツいているのも丁度その辺りからだ。

恐らく謎の美少女転校生が来た言つことで男子共、いや女性陣も感極まつてゐるんだろう。

「何処から来たの？」

「イギリスからですよ。」

「どうか日本語うまくね？ 何処で習つたの？」

「幼少の頃から日本に住んでた事がありましてね。日本語はその時

に覚えたんですよ。」

「そりなんかあ。なら、話は早い。スリーサイズ教えてください！」

「フフフ、内緒で。」

無数の質問に対し、エリスに返していた。

桜井は口元に手を添え微笑みながら、

「人気があるみたいだね。」

「そのようだね。というかあの中に連司も居るし……。」

よく見てみればあの人混みの中に杉守連司も紛れ込んでいた。十中八九ナンパしているんだろう。海斗は相変わらずの悪友に苦笑い、

「杉守君が行つているのに、青葉君は行かないんだ？」

「ああ、ああ、ああ、中でギュウギュウ詰めされるのは息苦しいからね。」

「へえ、そりなんだ……。けど、そんなんじゃ別の意味で卒業できないぞつ。」

桜井は揶揄うように笑っていた。

氷川が保健の授業に言つた海斗の童貞疑惑。

あの授業以来、男子から女子からの田線が多少変わったような気がしたのは気のせいではない。

「……やめてくれ。」

「いのんじめん。ただ笑わせよ」と黙つてただけで、まさか気にしてこるとは思わなくて。」

「いや、大丈夫だよ。田歩讓つてそういうだとしても、30歳まで負けば魔法が使えるようになるのじこかひ。」

「魔法?」

「そう、30年間童貞のままで居ると魔法が使えるのじこよ。」

「え? ど、どひて……ね? え?」

桜井は困惑したように言った。

清純系と称された少女の限界。

海斗は童貞といつ言葉があまりにも聞き慣れて居ないことを語った。地雷を踏んでしまつたと、右手で自分の頭を押さえ自虐する。

「そう、30年間の道程で魔法使いになるつて事だよ。」

「あつ……ああ、そういう事ね！！ 氷川先生に突っ込でても授業態度とかでなかなか進級できなつて事だと思つたんだけど。そうよね……！！ 勘違いだよね」

しかし、彼女の言つた『別の意味』とはどういう意味なのか海斗は言及しない。

きっと、別の過程で卒業出来なくなると言いたかつたのだろうと頭の中に留めるのだ。

それよりも、あれだけ勘が鋭いのにこの手の話になると頬を真つ赤に染める桜井はどこか異質だ。

そんな桜井が拭うように元の表情に取り戻すと、再び教室の男子生徒の声は歓喜に満ちていた。

「にしても、うるせえな。」

「まあシユトレーベさんは美人だしね。きっと、アイドルの素質があるんだよ」

「そりか？ 確かに賑やかになりそうなスペックは兼ね備えてるけどよ。どうも腑に落ちないんだよな」

海斗は腑に落ちないよう腕を組んでいた。

エリスは確かに美人だが、男子生徒の殆どが注目する程の彼女が理解できないらしい。

飽くまで魔法諸事情に関わったエリスを知っているからだが、と海斗は思い返すと、

「フフフ……。」

「何が可笑しいんだよ」

と、考へてる最中に桜井の口が綻ぶと、その理由が見あたらなかつた海斗は首を傾げるだけだった。

「まるで彼女を知っているような言い分ね。」

ギクリッ、なんて肝を抉れられたような気分だつた。

思い当たる節があるからこそ海斗の胸中はクリーンヒットしたかの如く、瞬間に鼓動が高まつた。

これだから桜井は敵に回したくないんだ、と恐怖心を抱く頃、

「いやあ、中々の美人でしたよ～。」

都合の良いタイミングで悪友の連司が乱入した。

空気が読めるといふか読めないというか、しかしその陰で無駄な

労力を使わずに話を誤魔化すに済む。

海斗は割って入る連司に素直に喜んだ。

「まるで、骨董品店の中から当たりを見つけたような様子だな。」

「お前のその比喩表現は強ち間違っていない！ あの如何にもサラ

サラしてそうな金髪と吸い込まれそうな碧眼は中々見ないからな！」

」

「美女への評は良いが、その評論も此くらいたじろぎよ。度が過ぎる
と女性陣に引かれるぞ。色んな意味で。」

取りあえず語り出せないよつて美少女云々の話に於ける「ホールの線引きをする。

鈍感な連司なら爆弾発言に成り兼ねないことを言つかもしれない、
ところが海斗の余計な気遣いまで働かせていた。

「ほんと、海斗は細けよな。そんなんじゃ卒業出来るもんも出来
ないぜ。」

「おめえも便乗すんなよな……。」

重いため息を吐いた。

そんな気遣いも知らず、ちらりと一言で済ませた。
そして連司も授業の部分を掘り返した来たのだから、脱力感が湧き
上がるばかりだ。

「まあ安心しろよ。30年間、童貞を貫けばまほ……」

海斗が拳を振り上げ、連司の言葉を遮った。

堪忍袋の緒が切れたと言つよつは、桜井に話を回調させるため気遣
いである。

また、つぐづぐ自分は細かいと連司の言葉を痛感する。

「つ痛つてえな！」

「言い間違いに気をつけろよ。30年の道程で魔法使いになるんだけどな。」

「そうみたいだね。」

「お前等、何言つてるの……？」

「いや、お前の方が意味不明だ。」

「うん、全くだよ。」

頭を押さえながら、何を言つているのか解らないと首を傾げる連司。海斗が話題を調整しているとまでは気が付かない。

そこで桜井は何かに気づいた。あれだの集団も今はお開きになつたようだ、誰も居ない。

当然、その居ないとは席に座るべき人物エリスも含まれていて、

「ちょっと、青葉君を借りるけどいいかしら。」

と、窓際の席から声が聞こえた。

紛れもなくそれはエリス・フォン・シュトレーゼの声。

「何だよ。海斗～俺より先に抜け駆けしやがつて。」

「やっぱり知り合いだつたんだね。まあいいや杉守君、私たち一人で応援しましょつ……！」

「ちよつ……まつ

二人は冗談紛いに海斗の背中を押していた。

明らかに聞いていないぞ、と言わんばかりに顔が驚いている。

「「めんなさいね。すぐ用事を済ませるから、」

「俺の意見はかんけえねえのかよーー。」

海斗が吠えた所でエリスは襟を引っ張りながら強引に教室の外へと進んだ。

「それにしても、海斗はいつあんな美少女と出合つたんだろうな」「さあ……私たちでは想像を出来ないほどの出会いなんじやないかな」

「絡まれた不良を助けた……とか？」

「もしかしたら、強引……間違つてないかもね。」

「はあ？」

海斗は首を傾げ。

冷風ばかりが吹き込む屋上で一人の高校生が佇んでいる。現在はまだ昼休み、教室にでた直後から遡る。

教室から屋上まで、海斗の襟元を強引に掴み階段を凸凹凸凹と引きずり回したエリスは、
目的地に到達すると真剣な表情を浮かべながら「貴方も感じない？」
と言つてきたのだ。

「だから、感じてるのか？って聞いてるのよ
「保健体育なら、もう終わってるぞ。」

勘違いの海斗にエリスの右手は振り上がった。
冷風で感覚を鈍らせた海斗の頬に、痛烈で心地の良い音が響きわたつた。
頬には赤い平手打ちの痕。

「馬鹿！ そつちの方じゃないわよ！」
「痛つて……。勘違いするのも当然じゃないか」
「いいえ、そうやって邪な考えが働いてるのがいけないのよ。だから卒業できないのよ。いろんな意味で」

「こんな意味って、邪な考えはお前もしてるじゃねーか。というかもう言わないでくれ……。三連続に言わると流石に堪える。」

苦言を混じらせた海斗にエリスは沈黙し、多少の間が生まれると

「で、その様子じゃ感じて無いみたいだね。尤も貴方のことだから、こっちの都合に関わらないように敢えて感じてない振りをしてるんでしょうけど。まあ良いわ、貴方に関係のある事だから聞いてほしいの。」

「スルーすんな！」

平手で突っ込みたい所だったが、そもそもいかない。
エリスの表情は再び変わった、余程深刻な物なのか海斗もそれ以上の追求はない。

「少々厄介な事でね。この中に『魔術師』が居るらしいのよ

「ちょっと待て、魔術師はアンタ達の仲間だろ」

「いえ、必ずしもそうとは言えないわ。例えば貴方のような無所属魔術使いの中にも、金で雇われればどの勢力にも荷担するな ragazzi者とかが居るからね。」

其れは究極者消失後の異界の対立によって一際立つた存在。

本来なら無所属というのは独学で魔法に手を染めた魔女のような存在か、所属した魔術組織から破門された魔術師の事を指すのだが、それとは別に、見返りを受け取り組織に雇われる傭兵のような魔術

師が居る。

身分に束縛されず好きなように動かせる便利性から魔法組織による影の対立に使われる事がある。

しかし、今では戦闘要員として金さえ払えば異界勢力にも荷担する魔術師が居るらしい。

「魔法組織は愚か、金の為に異界勢力に荷担しこの世界の魔術師としての誇りを捨てた者を『だじゅつし堕術師』と呼ぶわ」

「墮ちた魔術師と書いて「魔術師」ねえ……。随分と洒落た名前じやないか。」

そんな称し方をする魔術師集団に向け皮肉を込めたように海斗は笑つた。

が、説明を聞いている限りではエリスが恐れてこることは今一出来ない。

光速の炎を操るヴェーシャと言つ実力者と渡り合える程なら然したる問題もないはず、しかもそれを自分にも関係在ることだと言われたのなら、尙更の話だ。

「で、感じたつていうのは別ね……。四時間も授業を受けていたけど、周辺に魔力の気配を感じたわ。」

「魔力の気配？」

「魔力は第二の血液みたいな物だわ。体の中にある別の血液をそそぎ込んで魔法を発生させる。この気配は体中に流れ出た後の臭いのような物だわ。魔法を作る際にも体中から魔力を解放する際に感じる物だからね。貴方は無知だから念押しで言つたけど魔術師だからこれくらいの初歩は解るわよね」

だから、俺は魔術師じゃないという突つ込みもいい加減懲り懲りな所。

海斗はエリスの説明をかみ砕いて理解することにした。

人間の体内に血が流れているように、魔法にも魔力という血液が流れることで成り立つものらしい。
要するに、魔法で氷の魔法が出ればその氷の中に血液が流れている
ところ事になる。

彼女のお陰で海斗は魔法を出すプロセスが理解できた。

魔法は魔力という血液を注ぎ込ませ事象を発生するもの。

魔力を粘土で例えるなら、魔法という形を作る場合はその形のよう

こねるだけ。

その出来上がった形が唱えられた後の魔法であって、それまでの“
こね方”を複雑にした物が魔術なんだろうと、理解した。

そして本題の魔力の気配と言つのも、魔法という行為を行つた後の
痕跡らしい。

例えて言つなら、臭いに近いもの。

それに感知したエリスは魔法の臭いを嗅ぎ分ける犬のような秘めて
いると言つことになる。

「今回、魔力の気配が感じたって言つのは此処に魔術師が居ると言
つているような物なのよ。」

「それで」

「私は考えたのよ。臭いを残すまでの必要性をね。」

冷風が流れているのに彼女は身震い一つせず淡々と言つている。

「つまり、魔術師が気配を残す理由つて奴を探つてるんだな。しか
し話が見えない。何で俺とそれが関係在るんだ。」

「と言つよつは、貴方の学校に魔術師が居たといつ事実。その事が
そつね。」

「成る程な。」

魔法事情に関わるのはまだ一回だといつて、海斗は自分で物わかりが良いと自惚れた。

気配を感じる理由は一つ。

一つは魔力を解放する事はエリスに向けた挑発だった場合。二つ目はそれが魔法を使った際に残された『必然の痕跡』だった場合。

前者はエリスのみに向けた挑発のため、海斗には関係無いことかもしれない。

しかし、後者となれば学校で魔法を使う必要性についての件で考察が始まる。

無論、学校で何故魔法が使われているのかは流石のエリスでも海斗でも理解できない。

しかし、解る事が一つだけ。

学校で魔法が発動したとなれば、少なくとも学校内の生徒が巻き込まれる可能性が在ると言う事をだ。

その巻き込まれた生徒の中に、自分は桜井、連司等が含まれたと考えるなら関係ないとは言い切れまい。

冷風で心身共に鈍った筈の海斗の思考が、その時は冴えていた。きっとエリスに頬もとを思いつきり叩かれた事が原因だろう、なんて思い返すと。

「しかし、単に挑発してるだけで、関係の無い可能性もあるかもし

れないぞ」

「実はそれはあり得ないと思うのよね。複数からして私に向けた挑発ではなさそうですし、それに私は魔力を解放してませんから一般人だと思われる可能性が高いわ。」

「へえ、魔力探知ね……。犬より鼻が効きそうだな。」

「なんせ、私は彼の有名なエリス・フォン・シュトレーゼ様ですもの。」

エリスは自慢げに小さな胸を張ると、冷風が流れる。

温度も寂しければ、胸も寂しい。目線が変わると小馬鹿にしたように海斗の口が綻ぶ。

「つて、知らないうちに何処見てるのよ。」

再び、海斗の頬に痛烈な心地の良い音が響いた。両方の頬に平手の痕、随分と生々しく残される。

「という訳で、暫くは協力して貰うわよ。犯人を特定し解決するまではね。」

不機嫌な声でエリスは声を流すと踵の向きを変え。階段の方へ前足を差し出した。

「はあ……。」

深いため息と同時に頬がヒリヒリしたから顔が強ばる。

結局魔法諸事情から抜け出せない青葉海斗、エリスが彼にどんな協力を求めるかは、まだ不明。

しかし解るのは彼の平穏は、残酷な冷風と共に過ぎ去っていく事。そしてこの瞬間に残されたのはこれから待ち受ける不安と、頬に伝う一度の痛み。そんな痛みを皮肉にも冷風が慰めている。

いつした屈辱と共に鐘の音が鳴り響いた。

教室の窓際で頬杖をついている男子高校生、青葉海斗は思っていた。周りに聞こえる先生の声をシャットアウトしながら、黒板にかかれた数式も禄に見ないまま外の景色を眺める。

エリス・フォン・シュトレーゼが来てから一週間程が過ぎ、丁度協力を頼まれて五日ほど経過する。

学校内でもエリスと海斗の会話が増えてきた。

クラスメイトは仲の良いクラスメイトで通つていて、飽くまで協力という名目で会話する機会が増えただけである。

「はあ……」

悩ましげに重いため息。理由はある。

昼休みから魔力の気配について学校内を探索しても、変わった進展が無いのだ。

いつも同じ事を考え鐘の音色が思考を遮り、結局あやふやのまま話は放課後から夜へと引き継がれる。

それが何回も繰り返されるという疲労感。

しかし何も進展が無いって事じゃない。とても些細な進展だが。

海斗はタオルケット一枚の生活から逃れ、ようやく部屋にもう一つ布団が増えた事。

尤もエリスの所持金五十円は変動していない。

要するに海斗は「恐喝してお金を稼ぐわ」なんていう彼女の言葉に背筋を凍らせ、

大型ゲーム機に費やす予定だった貯金をもう一枚の布団へ費やした、それだけである。

この魔法諸事情が抜け出せない。

しかし抜け出さないと日常に戻れないと、解決策を思索した所でツンツンとボールペンの丸い先のような物が海斗の一の腕をつついた。窓側に向けていた顔を振り変えすと、そこには心配そうに表情を眉を八の時の形にした桜井愛海が。

「(……大丈夫?)」

唯一の慰めが小声で気遣いをする桜井だ。当然、彼女は魔法諸事情について知らない。

しかし、海斗が悩んでいる事を見抜くのは勘の鋭い彼女には容易な事だ。

「(すまない……。大丈夫だよ。)」

自分を気遣ってくれる友人が居る。

その人達が救われるならエリスに協力するのも本望だ、と海斗は改めて言い聞かせ、

「青葉、この問題解いて見る。」

チヨークが黒板を刻む囁かな音が止まつた所で、教員はろくに授業を聞かでない海斗を指名した。

反応が無ことじりで窓際の席に視線が集まる。

「（青葉君……。）」

小声が聞こえた頃に、シンシンと再びボールペンが海斗の二の腕をつつく。

二度も心配されるとは、と桜井の優しさに口元が綻ぶ海斗。再び桜井に振り向いて、

「（やべり……。）」

と、振り返った先に複数の視線。この時間は大恥をかく羽目になつた

第四話『魔術』B

昼休み、その時間は曇りのせいか廊下は薄暗くて寒かった。魔法探索で来るはずのエリスと海斗の二人。加えて学校探検という名目だと勘違いして付き添つた一人の生徒。言つまでもなく海斗の悪友、連司と桜井だ。

しかし、単に学校探検の付き添いと言つよりはそれは違つていた。連司は「おまえだけ美少女独占して抜け駆けは卑怯だぞ」という妬みから、

桜井は「二人の邪魔をしないように杉守君を監視する」という名目で付き添つている。

その事で連司は兎も角 桜井が来てしまつたと言つ事実は喜ばしくなかつた。

この一週間、桜井とエリスの交流は少なかつたものの。僅かな短期間でのエリスも「あの子と話すと氣づかれそうで怖い」と恐れる程なのだ。

桜井の前で魔法諸事情を切り出すことは最早タブーとなつてゐる。珍しくも海斗とエリスの意見が合致した時だ。

「それよりも、二人は何時出会つたの？」

早速、一人の背筋が凍つたのは言つまでもない。

質問の前提「転校する前から出会つた」が桜井の中で決定事項であるからだ。

「えーと何時だつたかしら……ねえ？ 青葉君？」

「はっ！？ なんで俺に振るんだよ。えーと……転校する前にひょいとトラップってね。」

「ううう土壇場でエリスは取り繕つた表情を浮かべたまま、海斗は焦りつつも装い切れない冷静を醸し出した。

歩きながら桜井の目線が海斗に迫る。

「トライブルつて？」

言及された直後に、頭の非常用スイッチを押されたかの如く、海斗はつむぎ程思考を巡らせた。

桜井の火炎つじきゅうを沈静させる水が近くに無いか、と

「道に迷つてた所でバッタリ出会つたね。それ以来会話が弾んでたのさ。」

「ええ、そうよ。うる覚えだからよく覚えてないけどね、少し揉めたよろくな気もしたわね」

冷静を取り戻したエリスが事の詳細を作り上げた。

恐らく揉めたというのは、昼休みに海斗を無理矢理引きずり回すという荒技を裏付けるためのでつち上げた説明だらう。海斗へ慣れ慣れしかつた理由が強調される。

自分で賢いと言つてる分、確かにそういうふうに回して頭は回つていた。

「へえ、やっぱり会つてたんだね。」

心臓を一突きされた氣分が生まれた。桜井の方が一枚上手らしい。質問の『出会つている』という前提は会つているか否かを確かめる為の罠。

それも知らず目先に食いついた一人に痛烈なダメージが入る。やはり、敵に回したくない、と一人は思う

「まあ良いや。」

桜井は追求しなかったことが不幸中の幸い。

連司は「出来てんのか!?」なんて声が響くが他の生徒も歩いていた為、桜井も含め他人を装った状態で進んだ。

しかし、この調子では魔法事情が公になつてしまつ為、海斗達は対応を改めなければならぬだろう。

無論、連司なんかは眼中に無いみたいだ。

廊下の曲がり角に入ると、これから向かう部屋『理科室』について話が上がつた。

「そついえば、理科室は氷川先生が鍵を持つてるんだよね
「餅の論理、氷川から鍵借りてきたぜー」

連司の右手から些細な金属音が聞こえる。

連司と氷川は仲が良い事は知つてゐる。

例えるなら、最近流行つてていると言つ抱き枕カバーが解りやすいだろう。

抱き枕カバーとは文字通り、薄平べつた円筒上の150cm程の抱き枕にかけるカバー。カバーと言つても描写が施されたカバーだ。その描写物の中でも人気なのは、アニメキャラクターを年齢指定ギリギリまで際どく描写した物。

要するに氷川と連司ならその需要と好み、また危ない使い方について一晩中語れる程、相性があると言うことだ。

そして、連司の右手には氷川が持つべき教員用の鍵がそこにある。そんな同士の願いと美少女転校生の為ならばと、氷川も人肌脱いだみたいだ。

けど、エリスの着眼点は違う

「餅の論理って何ですか？」

鍵についてはどうでも良いからして、極些細な事だった。ブツ、と海斗の息が小さく漏れると視線はエリスから連司へ

「馬鹿の造語だ。気にしない方が良い」

「馬鹿つづーなよ！ 僕がいなかつたら理科室にいけねえんだぞ？」

「此処は、お前にじやなくて氷川に感謝しよつ。」

そんな所で揶揄からうつ海斗に連司の手は上がったので、小走りしながら連司から逃げる。

そして、

「ユウリカ、廊下は静かに歩きなさい。」

と、海斗の後ろからエリスでも桜井でも無い女性の声が響いた。後ろを振り向きたのに居たのは、胸に届くか届かない程の茶髪のツ

インテールに赤と青のオッードアイ。

制服からでもラインが見えるスタイルの良い女性。

二年生の海斗達の上履きのライン色は青だが、彼女の上履きの場合

は緑……即ち三年生である。

「あれ……月夜先輩？」

首を傾げ、桜井は知っていた。と云ひよりは全員知つても可笑しくは無いはず。

名前は月夜流香。桜井と同じ部活の先輩にして帝律学園生徒会の会長。

学校中のマダムとして通つてゐる。そんな女性から直々に指摘を受けた海斗は、全く彼女を知らず。

一方の連司は自分にでは無く、海斗に注意されるのを見て妬ましそうな目で拳を前に出していく。

「あれ、桜井。知り合いか？」

「うん、部活でお世話になつてゐる先輩。といふか生徒会長だね。」

「え、生徒会長……？」

「それよりも青葉君。廊下を走つちや駄目だよ？ 解つた？」

海斗が桜井に訪ねたところで、生徒会長が両腕を腰に押さえ堂々とした立ち振る舞いをする。

「すみません。といふか、何で俺を知つてゐるんですか？」

「うん？ ああ、『めん』『めん』。愛海の話でよく持ち上がつてて。ちょっと大人しそうな青葉君と、対照的にちょっとひんやりな杉守君と仲が良いつてね。」

「俺つるせここんすかー!？」

困惑そうな表情を浮かべる桜井に対し懸念の眼差しを向ける連司。それを見ていた生徒会長がクスクスと小さく笑うと視線が連司からエリスへ

「それと、貴女が噂の転校生かな？」

「はい、エリス・フォン・シュトレーゼです。」

「成る程、エリスちゃんね。」

微笑んでそう呼ぶ生徒会長に、海斗のブツと小馬鹿にするよつな息を吹き込まれる。

傲慢で理不尽で残忍なエリスが『ちゃん』付けされているのに違和感を感じて笑いが込み上がっているらしく。

何の事だと、笑う海斗に対しては首を傾げる一同だが、全く気がつかない。

そしてエリスが拳を振り上げているのも、

「ドン、といつ鈍い音が響いた。

「全く失礼よね」

「痛つてえ……！」

痛言を漏らしながら頭を押される海斗に、エリスはそっぽを向いて

いた。

桜井は一人は様子を見て「やつぱり、仲が良いわね」と微笑んでいる。

そして連司は、

「海斗オオオオ！！ イッパアアアアツ！！」

拳を再び振り上げ、再び大激怒。そんな様子を見て不味いと悟った海斗は廊下を走りだした。

「さりげなくどつかのドリンクでMみたいに言つたっ！！

「てめえ、俺にも殴らせろ！！ 羨まし過ぎる……なんであんな美

少女に殴られるんだよ！！」

「黙れ、変態。うらやましくもなんともねえよ」

「ゴムを弾くような音が、複数に響きわたった。

連司と海斗の追い駆けっこ。

連司は些細な金属音をチャラチャラ鳴らし、海斗は逃げ惑ひ足のようには息を荒くする。

注意された矢先にこれだ。

「走るなって言つてゐるのにイイイイー！」

生徒会長の右足が子供のように地団太を踏んだ。

稚拙な追つ駆けっこ。同じ場所をグルグルと回りながらそれは続く。逃げ手の海斗も、多少の思考は回せば良い物の。しかし連司も海斗の足に追いつかない。

「はあ……。50歩100歩ね。」

エリスの拳が、二人の馬鹿を捉える。

鈍い音が一回響いた所で鬼ごっこは終了した。

「……作戦成功！！」
「何が作戦成功だよ……。」

女子生徒に殴られた男子高校生が一名。その内一人は同じ女子に一回も殴られる羽目になり、もう一人は何故か喜んでいる。

呆れたような表情を浮かべるエリスと、苦笑いを浮かべる桜井と、顔を真っ赤に染めながら地団太を踏む生徒会長。その中でもマドンナと呼ばれた女性、生徒会長は何処か子供地味でいて、そのギャップに連司のボルテージが高まりつつあるところ。今度は海斗の拳が振り上がる。

……ようやく静かになつたところで話は切り替わる。
生徒会長が加わり、廊下を弾くゴムの音が静かに響いた。

「で、理科室ねえ。中を見る必要はあるのかしら?」
「まあ氷川に鍵借りたんで、折角なので見ちゃいましょうよ。」

理科室が目と鼻の先にあるところで、連司は鍵を取り出しながら言った。

最後に感じた魔力の気配、その場所が理科室。この場所を調べて何もなければ、宛はなくなってしまう。

念入りに調査する必要があるわ、とエリスの目つきが変わる。

鍵穴に鍵を指すと、扉は連司の手でゆっくり開かれた。

そして海斗は見逃さなかつた、その時の生徒会長の浮かない表情を。

「……」

青緑の床に、数人が使える程の机が複数。

透明ガラスで見えた灰色の棚の中には透明のフラスコや理科特有の実験用具が並んでいる。

そして隅の方で異様に佇んだ人体模型。特に変わった物は今のところ無い。

「エリスさん、折角だし中に入るか？」

「ええ。」

連司の誘いに遠慮無くと、エリスは理科室の中へ入る。上から下、棚の隅から隅までと念入りに探つた。エリスは堂々としている。

変も無い理科室で探りを入れていてる女子生徒を不自然がる者は多くなかつた。故に周りは言及してこない。

異国生まれだからこの光景が奇妙に見えるんだうと、という周りの覗みが物語る。

そんな事を言われても手段はあるのだが、とエリスは思考の中で算段を練つていてるが。

そこで動きが止まる。

「（此は……？）」

最初から薄々勘づいていたけれど。それは確信に変わつた。透明のガラスに守られた本棚から、エリスはそれを感じ取つていた。黒く淀んだ……色合い、五感を通しては決して見えない物。理科室の中には、見た事も無い文字でつづられた本の見出し。

「（魔術書……。）」

心の中で一言、それは間違いないと本に睨み付けると。

まさか……と脳裏に何かが遮る。

思い当たる節が一つだけ、と視線を本に戻した時

「（消えている……！？）」

目を見開くと動じ軽くため息を吐く。
魔力の気配察して、その言葉が事実だとこいつに確信したのも数秒も満たない。

まるで舌を見せつけられた気分だと、エリスは憤りに思う。
しかし、此で手がかりが掴めると解れば流れは傾いたも同然。
念入りに調べた結果、それ以外は何も無いと察知するとエリスは理科室を出る。

「どうだつた？」

「少し不思議な所でしたね。特に人体模型。あれはちょっと怖かつたわね」

少々脅えた表情を浮かべると、連司は溜まらん表情だ、と言わんばかりに囁かなガツツポーズを取る。

海斗は連司を小馬鹿にしながら笑い、桜井は不意に時計の針を見やる。

「用件が終わつたようだし、そろそろ時間だね。戻ろうか。」

「もう、そんな時間か……。」

「うん、エリスちゃんが見るの長かつたからねえ。」

「あ、すいません……。」

頭を下げるエリスに、大丈夫だよ、とオーバーに桜井は手を動かす。

そして生徒会長はと言つと、エリスが見たガラスケースを遠目から凝視している。

海斗は彼女の様子を怪訝な目で見据え、

「……。」

「あの、せいと……」

キンコーンカーンコーン

窺おうと前足を踏み込んだ瞬間に、丁度良い所で鐘の音が遮つてくれた。

昼休みが終わつたと同時に口づるせい五時間目の先生を一年一同は頭に思い浮かべる。

遅刻したら不味い、と焦り出して一年一同は猛ダッシュで廊下を突き抜ける。

結局、昼休みに見せた生徒会長の様子の意味を海斗が知ることは無かつた

「魔術書？！」

放課後にて、日が沈み掛けた時間帯に海斗の大声が響く。

周りは殺風景、地平線の彼方まで電柱が並列に佇んでいるだけでアスファルトのが広がつたただの一本道。

隣にはエリスが歩いている。桜井や連司は一緒にいない。

帰り方向が同じ方向だと知られるのは海斗にとつて都合が悪い。

そのため、互いに別ルートで行き途中で合流するという作戦を行つと。

合流直後に「魔術書よ」なんてエリスが唐突に言つてきたのだ。

「その魔術を読んで、魔法が使える奴だよな？」

「魔術書つていうのはそういう単純な物じゃないよ。」

「人は全員魔力を宿しているけど、その使い方を知らないし認知する事も五感で感じ取ることもできない。魔術書は魔力を使いこなすキッカケを授けて、その力の振る舞い方を記した物」

説明を淡々と済ませた所で、海斗は辺りを見回す。

人が誰も居ないとはいえ、堂々とした声で語られては目立つてしまうのも当然だ。

そんなエリスの代わりに気を配つていると、

「けど、魔術書はそこまで都合の良い物じゃない。」

「例えばお前が風魔法を使つように、誰かが水魔法を使つように種類があるからか？」

「そりゃ。魔術書一冊一冊が、全員を受け入れる物じゃないのよ。」

魔術書は『魔力で綴られた文字』を通して、五感では感じ取れない魔力を認知し、その魔力の扱い方術式について記載された物。

端から聞いてれば都合の良い響きがする。しかし、『魔力の文字』の理解は全員が出来た物ではない。

血液にも違いがあるように、魔力にもその性質は無数に異なる。魔力の字を理解することは、魔力の字と性質と己の魔力が類似、または一致しなければ理解することが出来ないのだ。

そして、性質が合わなければ理解所か、場合によつては死に至る可能性だつてある。

そんな魔術書が、学校に佇んでいた理由……エリスは不自然に感じていた。

「要するに、お前が風魔法を使う才能があれば専用の魔術書を見つければ手つとり早いんだろ？」

「ええ、けど類似する魔術師は40%で、完全に一致した魔術師なんて世界で十名も満たないわよ。残りの人間は、苦しい鍛錬を何年も重ねて自分の魔力に理解して、そして賢者達がしてきたように自分だけの魔法を作り上げるのよ」

「やっぱ魔法だなあ。要するに適合者は運が良い奴つて事だね。運良い奴も居れば悪い奴も居る、運良い奴は正しく魔法の奇跡つて奴を受けてるんだろうな。」

きめ細かに説明するエリスに対し海斗は感嘆な声をあげながらも、魔術に関してはアバウトに捉える。

しかし、そこで本題へ切り替わるわよ、とエリスが話を切りだしてきた。

「そして理科室で見つけた魔術書は今まで見てきたのと違つて異様なのよ。」

「普通魔術書に魔力が宿つてるのは”文字”だけなんだけれど、私が見たあれは本自体に魔力が宿つてたのと同然だつたわ。」

「それほど魔力の強力な魔術書つて事か……。」

「強力な魔術は異例だけど、それが”転移”しているつて事が不思議なのよ。」

「え？」

エリスが感じた魔力の気配は複数だった。

その複数の性質はどれも同じ、そして理科室で感じた魔術書の魔力性質も同様。

つまり、魔術書が転移をしながら気配を放つていてる。

もう一つ、魔力の気配が12時間毎に定期的で発生していると言つこと。

エリスは帰り道に向かいながら思考を巡らせると、

「挑発を見せかけて魔術師を絞り出す罠なんじゃないか？定期毎に複数の場所に魔術書の魔力を発生させ、そこに現れた人間を何回

も重ねて絞り込ませ顔の知らない魔術師を算出する。」

「そうすることで、情報的に相手の方が有利になるし邪魔者を探知するための自己防衛にもなる。魔力の気配が抑え、誰が魔術師か知らない状態なら尚更のことだ。」

「誘導トラップ……。成る程、賢いわね。」

「お前の話は大まかにしか理解できてないけど、俺だつてこの魔法事情からはオサラバしたいんだ。伊達にただ頷いて聞いてる訳じゃねえんだよ。」

感心したようにエリスは言つが、その言葉は立場が上であることが前提になつてゐる。

解つてたからこそ、悪態をつくより海斗は言つと立ち止まる。

視線のすぐ先には壁が白いペンキで塗られた建造物。

塗り固まっているが所々ピースが欠けたように剥がれていて、ペンキの上からは墨のよくな黒い汚れががにじみ出でている。

一定間隔で距離を置かれた扉は全体的に黒く、黄色の細い線が複数引かれ、綺麗な額のよう扉を彩つた。

一階の右から一番目の扉に海斗の右腕は伸びた。

「着いたぞ。」

帰宅時間を報告する市役所の鐘の音はまだ響かない。

その頃に海斗とエリスはアパートに帰宅した。いつものよに薄暗く殺風景な畳の景色が広がり。

居間の壁のボタンに手を伸ばし電気を付けると、エリスは卓袱台の方に腰を掛け適当に転がつてていたチラシの裏とペンを拾い上げる。

その一方で海斗は衣服を堂々と脱ぎ上半身裸に。最初は頬を赤くして両手で塞いでいたエリスも流石に慣れたのか、呆れたように溜息を吐く。

「何でまた脱ぐのよ。」

「ベタベタするのは嫌だからね、今のうちに着替えておくんだよ。」

「本当……デリカシー無い人。」

「そこまで言うか……？お前はデリカシー所か、人のプライバシーも考えない奴だろ。勝手に人の家に住み込んで人の布団を占領して。おまけに所持金は50円。」

「了承したのは貴方よ。それに布団の件は仕方ないじゃないの。本当に50円しか無いんだから」

便乗した海斗に対し、溜息を吐きながらエリスは反論した。

こうして男女間の生活の違いに、お互に不便もあつたみたいだが気持ちによる溝もたつた一週間で埋まってしまう。

良い意味でも悪い意味でもイメージに纏めるなら、結婚から数十年を迎えた夫婦のそれと何ら変わらない。

仲の良い、仲の悪いようにも捉えられた曖昧な風景。

「ユウちは住ませてるんだから、少しは感謝くらいはしてほしいさ

……。」

「感謝してるから居るのよ。それ以上の強要は恩着せがましいわよ。

」

「本当に感謝していると？」

「しつこいわね。それだと本当に卒業できないわよ。いろんな意味で。」

「卒業しないが何故前提になっている。それにしても、今この瞬間目の前で卒業正賞を受け取る事くらいは出来るぞ。」

「あら、予想外の答えだわ。私という学校で卒業するつもりなのかな、けどそれは東京大学より価値のある卒業よ。」

「次から次へと……以前までは男の上半身を見るのさえ恥ずかしがつてた奴が、こうこう話にはついていけるんだな。」

苦笑い、エリスの中途半端な人柄は桜井とほぼ似通っている。桜井も、勘は切れるのにその手の話だと鈍感だと言つよつて、エリスにもこういう下な話はいても実際の下には耐性が無いという些細な矛盾を持っている。

「う、うるさいわね！……あんな汚い物を見たら田を押されたくなるでしょがつ！」

頬を真っ赤に染めながらエリスは言つ。

しかし、なんだかんだ言つて恥ずかしがる時は恥ずかしがる。曲線を通り越してギザギザな変わりように海斗は苦笑いを浮かべ。

「それに……あなたじゃ無理なのよつ……私で卒業できないのは確実ですものつ！」

「何を根拠に。」

「一つは、私が強すぎるとこいう事！……一つはそれを知つても尚、

卒業試験を受けるといつ、覚悟が無こと。」

「そしてもう一つ、これら二つを裏付ける全ての根本、それは貴方が童貞であるという事よつ……」

「……そこまで俺のプライド傷つけようとするなら、本気で卒業試験受けちゃうぞ。」

「無理よ。」

「出来る。」

「なら、試してみる?」

感情的から嘲笑から誘惑へ、少しの間に沈黙が続く。

何を言つても無駄だという海斗の重い息が流れ、童貞という事実が揺らがず。

エリスは構いもせずチラシの上で握った筆を動かす。

「で……魔術書についてどうだ。」

エリスの様子を見据えた所で彼女の口が綻んだ。

「あら、本当に無理だったのね。もしかしたら合格出来たかも知れないと言つのに。」

「ああ、参ったよ……！完敗しましたよーー！？だから魔術書の話に移らせてくださいーー！」

棒読みをしながらただ声だけを響かせると、女から勝ち誇ったような笑みが浮かべ、

「よろしいわ。じゃあ、本題だけ貴方の予想は外れてると思つたよ。」

「外れている？」

「そもそも何百人の生徒の中から隠れた魔術師を絞り出す為に、理科室なんて施錠された部屋に転移しないと思うのよ。」

それに12時間毎よ。昼休みは納得いくけど次の気配は深夜、誰も居ないじゃない。」

「だが、施錠されてるからこそ入り込んだ人間を算出しそうく……。」

「いえ、それでも考えられるけど強引すぎじゃないかしら？ 相手がそこまで確實に渡つて絞り出す意味や価値が解らないわ。」

「つまり、一から考え直しつて事か。」

考え詰めた表情をして、海斗は思考する。

発生する場所に共通が無ければすぐに転移する。

まるで翻弄しているように魔術書は進む、その意図が何なのか今のところ不明。

そして

「もしかして、対象が俺たちじゃなくて『位置』なんじゃないか？」

「『位置』？」

「いや、施錠された理科室に魔力を発生させたのは挑発する為なんかじゃないなら、逆を考えて”しなきゃいけない”って事じゃないか？」

「しなきゃいけない？」

「だって、魔力が放出する時って人間が人為的に解放するときか…」

「……『魔術』を発生させる時ですわーー！」

閃く、エリスは鞄から何かを漁り取り出した。

一つの紙束ともう一枚の紙切れ。入学時にもらつた学校のマップが書かれた詩織と、毎度恒例のチラシの裏。

マップを見ながら1F、2F、3F、4Fと東西南北と全てを頭の中にイメージし立体的にそれらを繋ぎあわせ。

第四話『魔術』

ようやく書き終え、建築士顔負けの細部にまで渡る立体的な図面が完成した。

エリスは疲れきったようになり息を吐くと位置を再び鉛筆を持ち直し、

「最初私が感知したのは食堂……そして音楽室から……理科室までつと」

図面の場所に番号を振ると、やつぱりね、とエリスは首を縦に振る。どうこう事なのか海斗は首を傾げ、訪ねた。

「なんで魔術を複数発動してるんだ。」

「魔術が完成してないからよ」

「どうと？」

「まあ見てなさい、」やつて順番通りに線を複数に結んでね……」

そうこうとエリスは結ぶ、一つの螺旋階段を複雑にしたような形が現れた。

「なんだ此……」

「三次元形魔法術式ね。普通、魔術式は平面に絵を描く一次元的な構造で術式を発生するんだけれど、この魔術式はかなり高度な立体的な魔術式ね。」

三次元形魔術式、戦闘では実用されないほど高度過ぎた魔術式。並の人間が普通に唱えられる物ではなく、複数の人間を使っても魔術式を展開することが難しい。

「貴方の予想はどれも当たってたわ。これだけ強大な魔術式を使うんですもの、恐らく気配を感づかれるつていうリスクを武器にして、邪魔である魔術師が居ないか探つてたんだじょ。昼休みに気配を出したのも理由がそれかもしれないわね。」

「しかし、驚いたわ。まさか魔力の籠もり易い魔術書に媒介し、複数回でこれだけの術式を完成させようとするとは……。」

感嘆というよりも、驚きを隠しきれないエリス。

敵は余程の魔術師か、と言わんばかりの恐れが滲み出ている。

「その術式は安全な物なのか？」

「解らないけど……学校で張るような規模の物じゃないし、何よりもこの見たことも無い術式からして異界人の可能性があるわ。」

「じゃあ、止めた方が良さそうだな……。」

「ええ、出来るだけ早くにね。私の予想が正しければ後二回……いや、今日の夜に完成する可能性があるわ！」

「次の夜、12時間毎だと考慮すれば……あと六時間。」

巡る巡る思考の末、海斗達は再び学校へ。

第五話『人為的魔力暴発』

その日の夜、公立高等『帝律高校』では一人の少女が窓辺から差す綺麗な淡月を見上げていた。

そこには民衆の喧噪など尋めきは無く、ただ静寂と季節特有の寒風が流れている。

そして、もう一つ。黄土色の円周450m程の広大なグラウンドを遮る懐中電灯の光彩。

それを女は窓辺からそれを見下ろした。視界からも認識からも豆粒のように小さな存在。

この夜になれば帝律学園内に数少ない人員の警備員が配置される。以前、窓ガラスが割られたという事例が発生してから警備が強化されたと言われている。

しかし、人員不足か予算不足なのか警備員の中では時々日直のように担当が変わるが教師も含まれているらしい。

少女は深くため息を吐いた。肌を凍てつかせる風は何処までそのため息を運んでくれるのだろうか。

「今日が……最後の日……。」

蒼と紅、双眸の瞳を細め揺らりとその時が来るのを待つた。

転移時間まで一時間切る。準備は万全……寧ろ万全所か青葉海斗にとつては丸腰も同然だった。

考える策は特に無くノープラン。

エリスは特有の勘違いを発生させ「ヴェーシャの光速技くらい避けられるんだから一人でなんとかなるわよね。」と。

あの時はあり得ない骨髄反射が働いたのか、それとも第六感が事前に察知したのか、どちらにせよあの時は偶発的な奇跡だと主張を重ねても、

魔法諸事情特有の不思議詭弁発言が披露され、逆に相手からの期待とその重圧が重なる羽目に。

自分も桜井や連司の為にと期待に答えようと試みたのだが、その結果、右手に料理用のナイフ一本サングラスに複数のジャケットやタンクトップを重ねた防寒装備。

魔術師というか人殺し以前に不審者の装備だ。

「それで、次に魔術書が何処に現れるのか予測できるのかよ？」

「ええ、目干しい所が一箇所ほど……。」

「何処なんだよ、そこは。」

「あの形、法則性からしては体育館か……屋上ね。」

淡々とうに語つてみえるが、その後に海斗を見ればクスクスと笑い声が聞こえる。

まるで小馬鹿にしたような、センスが無い中年を見ているかのようだ、兎に角その瞳はサドとしか言いようがない。

「笑つたな！？ 笑つたな！！ 俺が戦力になるつて期待したお前
が馬鹿なんだよ！！」

大声が響かせたら、静かにしなさいとエリスが耳元で囁いてくる。
ようやく学校の門……黄土色の地面を懐中電灯の光が遮ぎつている。
外の見回り警備員。

第五話「人為的魔力暴走」B

「警備員ならお前くらい簡単に突破出来るよな。」

「ええ。」

エリスの体は、風船のように軽いのだろうか。脚を動かしただけで2メートルはある校門を難なく飛び越えていた。感嘆の声を上げたいところだが、そんな猶予はそこまで無い。校門に手を伸ばし腕力の力でよじ登り、校内へ侵入。

「で、警備兵の突破だな。」

「正直、眼中に無いですわね。」

「酷い言ひょうだな。」

眼中にないといふ言葉を聞けば、早速エリスから異形の紋章、魔術式が発生して。

エリスが海斗の手を繋ぎ、景色はいつの間にか薄暗い廊下の方へと。

「そうか……こういう時に転移魔術が役に立つ訳だな。」

「それでも驚いたぞ、手を握るなら最初に言えば言い物を……。」

「

恥ずかしがるように、海斗は頬をかくけれど。

エリスの返事はない。しかし、手にはなま暖かい手の感触が続いて

い。

横に返ると硬直したエリス、蛇に睨まれたようにならの如く固まつていて。

海斗は怪訝な目を向けて訪ねた。

「エリスさん？」

返事がない。固まっている。

しかし、返事の変わりに手元から汗のよつたぬき感觸が。

「エリス・フォン・シュトーレゼ、エリス・フォン・シュトーレ

ゼ。

「…………。」

「マイケル・フォン・シュトーレゼ。とにかく・早く行こうぜ・シ

ュトレーゼ」

「…………。」

返事がないようだ。寧ろ手の温つきは増すばかりで。

しかし、返事がないなら都合の良い機会では無いかと海斗の思考が回る。

「一度こじは三度在るとも言ひますのでの鬱憤を晴らすつと、

「サドチック・貧乳・シュトレ……」

「どうでええええい……聞こえてるわよつ……」

三度目の正直。

途轍もない握力で海斗の右手で握りしめ。ボンと、鈍い音が複数炸裂した。

まだ始まつても居ないのに、RPG世界のダンジョンに入つたばかりなのに、そこにはボス級の般若が現れている。

複数の打撲を受け、童貞と決めつけられ。そして結果的には体力的にも精神的にも瀕死状態の主人公が呆然と佇んでいた。自分の所業も含め、こんなで先に進めるのか、と。

「とりあえず、い、い、いくわよつ。」

「はあ……。先ずは職員室じやね。」

言葉を何度も噛みながらエリスは震わせ、海斗は静かに言った。

「しょしょしょしょしょ、職員室ううう！？」

「体育館の扉を開ける鍵が必要だろ？氷川の鍵を借りたときも職員室からじゃないか。」

第五話「人為的魔力暴発」C

エリスは体をビクリと震わせ、廊下中に声が響くと。

「ちょっとうるさいぞ。体育館は施錠されてるんだから保管されている職員室に行かなければ高い確率で宝くじを引くのと同じ事だぞ？」

「黙目だわ……！　職員室は黙目……　絶対黙目つ……」

「けど体育館の鍵が。」

右足で地団太を踏むエリスは子供の我が儘のそれだ。

しかし、金属音がぶつかるチャリチャリした音が懐から響く。エリスはそれを取り出した。

「馬鹿ねつ！！体育館の鍵は此処にあるわよ！！此を使いなさい！」

「おい……それどうしたんだ？」

「杉守君から盗んだのよつ！！　私が近づけば、あの人隙だらけだつたからねつ……！」

「へえ……。じゃあ移動手段は万全だと。」

「そ、そりよ、全く馬鹿の事、い、言わないでほしいわ。」

「というか……何で、そんなにテンパつてるの？」

「別に、テンパつてなんか無いわよ！！　ただ、暗くてこわ……」「こわ……？」

「い、いいえ、暗くて見えないから警戒してただけよ……。ば、場所とかあまり慣れないから。」

それでも震えた声でエリスは言つた。

海斗はそうかいと、微妙な視線でエリスの表情を捉える。

「それで、要するにお前の事だから、手に別れるつて案だろ？」「へ？」

「い、いや……だつて魔術書が転移して魔術式が完成する前に止めるんだから、一手に別れないと止められないだろ？」「そ、そ、そ、うよね。なら、私は屋上に行くからね……！」

「ほう、屋上ねえ……。」

怪訝な眼差しで海斗は見る。

「だつて中の方が……！　いえつ！　外の方が風魔法が使いやすいですし体育館だと色々能力を制限されますからねつ！！」「成る程な……ところで中の方がつて？」「い、い、言い間違いを深く追求しないでちょうどいい！！　童貞つ」「（だつて、中が思つた以上に真つ暗で怖いだもん……。）」「（

とても幽靈が出るとは口に出せない。魔術を携わっているのにも関わらず、いや寧ろ携わつてゐるからこそ、幽靈への感知は鋭く唐突に驚かせるそれを恐れていたのだ。

サドティック、傲慢、有名魔術者というあらゆる面でも実力を發揮するエリスの唯一の弱点、そのプライドと心靈現象。

それに気がつかない海斗にホツと胸を撫で下ろすが、その時だ。スタスタと背後から何か聞こえれば肩を小刻みに震わせた。

「……誰か居るのか？」

「（）わいこわいこわいこわいこわいこわい。」

第五話 「人為的魔力暴走」 D

海斗は恐る恐る背後を見る。

エリスの胸の鼓動が高鳴り、堪えぬよ／＼に涙袋に水滴が溜まつてしまふ。

そして背後に居たのは……。

卷之三

懐中電灯の光彩が下から上へ、その顔がおぞましく現れれば海斗の
平静にエリスの悲鳴が。
耳を塞ぎたくなるような寧ろ女性オペラ歌手のよつた、凄まじい音
響が廊下中に響きわたつてゐる。

ପାତା ୧୦୦ - ୧୦୧

それに釣られ背後から裏返つた男の声。

敵なのか味方なのかもわからない。

ただ懐中電灯の光と男の声、エリスに確認を取りうと見回す。

「ちょ、エリスつ」

そこにエリスの姿が消えている。
とつたに転移魔術式を発動したのか、そんな言葉が頭の中に浮かんだ頃。

闇に包まれた黒い人影を呆然と見上げる。

戦闘態勢に構えようとしても腰を抜かした所で、不利な状況にたたかれている。

そして護身用の料理包丁もさつきの意表によつて暗闇のどこかに紛れ去つていた。

何重にも着衣した防寒用のジャケットの中から、着すぎたせいで新陈代謝が回つたのか、それとも恐怖心によるものなのか、あまり感触の良くない汗が流れていた。

そして、黒い人影が前かがみに海斗の方へ迫ると……。

「つたぐ、何だよあの転校生。俺を見た途端喘ぎやがつて。」

よく聞けば聞き慣れた声、海斗にではなく近くの寝中電灯に手が伸びる。

「はあああああ？」

「つたぐよつ。こんな寒い時期に肝試しかよ？ いちやいちやしあがつて、しかも女に逃げられてやんの。」

「何でお前が此処に居るんだよ……！？」 氷川……！」

懐中電灯を取り出した男の顔を再確認。
警備服を着た氷川淳教員。

「そりやあ、お互い様だろ。俺はなあ……理科室の人体模型に抱き枕カバーをかけてだな。」

「てめえの頭の中は結局工口しかねえかよ……」

「ちなみに今のは杉守に頼まれた事でな。明日、愛しの人体模型を使つて……。」

「おい、嘘も大概にしろ。流石に連司はそこまで墜ちていないぞ！」

「……まあ冗談は止して、担当が回ってきたから警備してるのよ。俺は空手柔道ムエタイとかあらゆる武道を嗜んでるから警備員の補佐に最適だろうつって。」

懐中電灯をクルクル回しながらと辺りを見回す。

「そりやいえば、彼女は？」

第五話『人為的魔力暴走』 E

「逃げたって言つてるだろ?」

「だから、その後だよ。追いかけないのかよ?」

何しに来たとか、夜な夜な学校で何しに来たのかという追求は無い。恐らく、興味がないのか恋愛事情に関してだと察知して、干渉しないだけなのか。

「追いかけたい所だが……。」

困ったもんだ、と海斗はため息を吐いた。

辺りを見回しながら何かヒントは無いかと探ると、暗闇をよーく見据えて気がついた。

連司から盗んだ氷川の鍵が落ちたままだ。恐らくあの時の反動で工

リスが落としたのだろう。

海斗はそれを拾い上げ。

「恐らく体育館に向かつたと思う。次俺たちはそこに行く予定だつたから。」

「体育館つて、てめえ!? もう肝試しゴール地点に行く所なのか?」

「何だよ、ゴール地点つて。」

「体育館つていつたら体育館倉庫で男女間のお楽しみがあるじゃねーか!ー!」

「だからてめえはそれしか考えてねえのかよーー！」

と言いながらも、心中でほくそ笑む。
氷川が海斗の策にまんまとまつたところで、二人の足は体育館の方へと進んだ。

彼女疑惑が建てられたエリスは、屋上で大きく息を乱している。

「はあ……はあ……」と転移魔術式は使った物の、あまりにも意表を突かれたことで心臓の鼓動が速まっていた。

周りの景色を見て、ようやく動搖していた様子が平静に戻ると寒風が身を引き締める。

そして、30m程先に見える人影をただ見上げて……。

「やはり、貴方が魔術師でしたのです……。」

その先にいた茶髪を靡かせた女性は、

蒼と紅の双眸を鋭く光らせエリスの姿を捉えた。

見覚えのある顔立ち、ツインテールだった髪が胸に届くか届かないかのセミロングに変わっているが服装は相変わらずの制服。
彼女で間違いないとエリスは確信した。

「生徒会長・月夜流香先輩」

帝律高校二人目の魔術師・月夜流香は口元を歪めた。

「エリスちゃん……。いや、エリス・フォン・シュトレーゼさん。
やはり貴方が……理科室の時からそう睨んでたわ。しかし、本
当に現れるとは」

「あら同じ事を考えてたのね。私も貴方が理科室で浮かべた表情が
どうも気懸かりでしてね。」

「同じ考え……か。なら此も同じかしら?」

数m離れた対峙からエリスと月夜が互いに手を向けると、異形の紋
章が浮かび上がる。

「どうやら、同じみたいねつ……!」

その時は風が大きく吹き荒れていた

丁度その頃、戦いを知らない氷川と海斗は体育館の扉にかけられた施錠を解除したばかりだった。

風音が窓ガラスを叩くように廊下の方へと迫つても、最近風が強いなあという氷川の独り言しか呟かれない。

無論、海斗もそれに便乗したかのようにエリスが敵と戦つていると、いつ考えは全く視野に入つていなかつた。

「所で、あの転校生とは何時からつきあい始めたの？」

「だから付き合つてないって言つてるだろう。」

「あれが、もしかして主従関係つて奴？　おめえ……つ超うらやましいんだけど。俺でもそれは経験に無かつたぞ。」

「だーかーらー、ちげえつて！！」

「ああ、これから経験すんのか。すまんすまん。」

他愛の無い会話を繰り広げた所で、氷川の手が体育館へと伸びる。施錠された所にエリスが入つてゐるなんて視野は教員の頭には無いのか、それとも敢えて黙つているのか。

最早警備員所か、侵入者の共犯行為をしていた。

金属の摩擦音、頭に直接来るほどの甲高い音が響くと一人とも力強く顔をしかめた。

「氷川先生、解るよ。この窓ガラスを引っかいたようにも近い音が

「どうした？」

海斗の言葉が途中で止まると、その視線の先を氷川は見据えた。その先に在るものとは……。

エリスは苦戦していた。

月夜は手を翳し魔術を使つてきたかと思えば、彼女の肩幅の一倍以上の長さをした刀を取り出してきたのだ。

月光に同調したような鮮やかな色合いをした刃は小さな曲線を描き、刀身はエリスを捉えんばかりに鋭く煌めいた。

エリオは手元から風を纏わせた風弾を複数放出 月夜は容赦なく突き進み風弾を難なく両断する。

間に合うか否か。

それが勝負の重要な分かれ目だと感覚的に察知した。

しかし、中距離、遠距離で風を駆使した空間制圧戦術がメインだが、風を使い接近戦になれば話は別だ。

手段を切り替えようと、エリスの手元に異形の紋章。

風を集約すると再び、疑似的な風による刀身が現れた。

透明色で、見えにくい上に鎌鼬の殺傷性を利用して最大限まで殺傷力を引き上げる別名「風刃刀」。

それともう一つ。

そして自分の足に魔術式を展開させ、足が風に纏われると体が宙へと浮遊する。

風の補助を使って体を風船のように軽くし速度を高める補助魔法だ。

第五話「人為的魔力暴走」G

あとは自身の器量を以て前足を踏み込もうとした時、

(ツ……！…)

相手が早い、前屈みで間合いに潜り込んだ月夜。

両手で構えた刀を間合いから突き詰めるようにエリスの胸部へ突き前足を踏み込む。

エリスは地面を逆に蹴り、間合いを取り直すと足下に魔術式を展開し。

手に集約された風の刃が暴風をつ生んで、圧倒的な力で月夜の刀を下から上へ振り上げる。

しかし、

「どうこう」と……？

手を抜いた筈はない。寧ろ手応えがあつて振り上げたつもりだ。しかし、目を見開くエリスの頬に一筋の線が疾つていた。

月夜の刃は至近距離の暴風を難なく貫いたのだ。

ただ貫いただけではない。軌道を変え攻撃に衝突してきたが、衝突時の相手の軌道は変わりすらしない。

故に一方的に相手は何の傷も受けず貫いたのだ。

平静にただ口元がゆっくりと動く月夜の前からエリスの姿が消える。足下に出現した魔術式は転移魔術。保険用に掛けておいたのが不幸中の幸いをもたらす……が、

三日月の鎌鼬が複数、エリスに突き進む。

とつさに魔術式を開拓しこちらも無数の風の刃で対抗するも、状況は明らかにエリスの方が不利。

「（私の風魔法を完封……単なる腕力によるものか……いや絶対有り得ない。）」

鎌鼬を無数に集約させた風刃刀、風による超振動を幾重に幾重を重ねたそれは竜巻をも両断する程の殺傷力を兼ね備えている。しかし、月夜の刃はそれを難なくと貫いている。仕掛けはあるんだろうが……強い。

エリスの口元が綻んだ。

「とつさに避けるのね……やっぱりそう上手くいかないものなのかなあ。」

子供地味たお気楽そうな声で生徒会長は言つと、走り出しながら刀を大振りし鎌鼬が無差別にエリスへ飛ばす。遠距離には大した問題が無い、小規模の魔力を駆使した小さな風弾で邪魔な所を相殺する程度。

しかし、それでは不自然だつた。

風刃刀の暴風を難なく完封しておいて衝撃には然したる問題もない。
それが腕力によって発生された事なら尚更。

それだけの腕力があれば音速を越えてただの衝撃を出すよりも、
もつと超越した因果でけた外れの事象を発生することができる。

しかし、それをしないのは何故なのか。
少なくとも解ることは……。

「貴女……魔術師じゃないわね？」

確信の一つは女のこれまでの行動から魔力自体の気配が無かつたと
いうこと。

身体能力にも補助がかからない彼女自身の確かな力量。

第五話「人為的魔力暴走」H

「フフ、それはどうだろ？ね……。」

戸惑う事も無く月夜は取り繕つように笑みを浮かべた。

その笑みに真意はあるのか否か、エリスは勘ぐつたが答えは浮かばなかつた。

しかし、魔力行動は今のところ行われていない。

と言つことは、手数を出しているのか出していないのか。

少なくとも後者の見解に至つた。

理由は簡単だ。あれだけの複数の魔術式を時間毎に維持し三次元型魔術式を形成するのだから、

手数は充分に減ると考えてもいい。

ならエリスの行動は単純に限られる。

目の前の相手の技術の解明、それだけである。

エリスは前足を踏み込み転移式で離れた間合いを維持するかのように、

右手を振りかざし空間中から風弾が無数放たれる。

しかし、月夜は詰めてくる。障害となる風弾をただ斬つて斬つて切り裂いて、

他の障害は用無しと言わんばかりに通り過ぎる。

(かかったわね……！…)

心中からは腹にハマつた相手に歓喜する。
もう片方の手がパチンと音響を奏ると、

過ぎ去つた風音はブーメランのよつにその最中を歩く月夜の背後へ
迫り、

エリスはその瞬間、再び魔術式を足下から展開させ。

「魔力の気配で読めてるのよつ！…！」

まるで解つていたように女は綻ぶと前に傾いて突き進む姿勢を変え、
ギリギリまで引きつけて同時に急ブレーキ、
その反動を駆使しタイミング良く刀を豪快に周囲へ振り回すと、全
ての風弾は消滅。

しかしその時、微かに魔力の残骸のよつな気配を感じた。

「（もしかして……？）」

エリスは何か疑問を抱く。

そしてエリスは見逃さない相手の隙を逃さず上半身程の大きさを纏
つた、

数倍も大きい黒い風弾を空間から出現させ月夜の四方に放つ。

「無駄だつて！…！」

月夜はまだ血で染まつてもいない美しい刀身を再び周囲に振り回し、無効化する。

そしてエリスは消えたはずの黒い風弾から再び魔力の残骸を感じするど、

（やはりね……。）

確信を抱く。

同時にエリスの足下から強大な魔術式が展開されると、天を貫かんばかりの無数の旋風が渦巻き竜巻を形成され、更なる螺旋回転を加えると、耳を塞ぎたい程の甲高い音が響く。その面積は屋上的一部を占領する程度、だがその威力はアメリカ等でよく発生するハリケーンなんかも凌ぐ程。

別名、神の暴風。

月夜は首響に耳を塞ぐ所か、寧ろまだやれると口元を綻ばせた。

第五話「人為的魔力暴走」Ⅰ

風の勢いに校庭のグランドに並んだ木も砂もその渦中に渦巻いていくと、

屋上の竜巻に気が付いた夜間警備員が腰を抜かしている。

普通の人なら仕方ないことだが……しかし、月夜だけは違う。

刀を強く握りしめながら思うのだ。

自分にはあの暴風を斬り裂けるという自信と、それを可能にした己の力量と、

そして何より、この勝敗を決したのは私だと言ひ確信が。

前足を踏み込み地面を蹴ると、風を斬り裂くよつた速さで月夜が疾る。

対するエリスの暴風もそれに負けじと接近、
人間砲弾の様な勢いと速度を持つ月夜とエリスによる強大な神風が
衝突した。

（決まりよ……！）

あんなにも吹き荒れた神の暴風に月夜が単身で突き進む勇断。
端から見れば無謀とも捉えるであろうこの光景……。

しかし、次の瞬間が『覆した』。

「行けエエエエエエエエー！」

そんな雄叫びにも近い声と共に、

暴風と呼ばれていた物が障子を破り捨てるように難無くと破られる。まるで浅い門を潜ったかのように堂々と進み、次は地平に佇むエリスを貫こうと突き進む。

そんな中、不意にも月夜の顔に向け風弾が放たれた。

最後の悪足掻きか、相手も魔力はもう少ないからそろそろだらうと、追いつめんばかりに風の弾を一つ一つ丁寧に斬っていくと、

「え……？」

月夜の視界が霞む。

風音を斬った後、何故か視界を遮るような微少な物が目に入つていたのだ。

どうしたことなの、と視界が曖昧になる所で不意に目を擦すつた所。

「私の勝ちね。」

月夜のすぐ周りには無数の魔術式が展開されていて、

そして彼女の首筋に再び形成されたエリスの風刃刀が添えられている。

首筋に些細な血を流しなら、月夜は驚きを隠せない表情で

「なんで……？」

困惑するような声だけが響く、動こうとしても動けない。魔法陣がそれを遮っている。

「貴女の戦闘技術を見抜くのは難しかったわ。風弾を消滅した直後の微細な魔力に感知しなければ、魔力不足で私が負けたかもしれない。」

「貴女の今使っていた戦闘技術、それは『魔力切断』。魔法に発生した物理現象を狙うんじやなくて、物理現象に流れている『魔力』そのものを斬る技術。」

。 月夜の保有する刀術は魔術にも異界人にも通用した別名『魔力斬り』

。 魔法から発生した物理という概念を無視し、その元素となる魔力を斬る。

そのため成り立った魔力構成は崩され、魔法事象そのものが消失する。

第五話「人為的魔力暴走」

積み木で重ねられた塔で例えるなら、その為に必要な一定の数（量）が魔力。

月夜は特殊な方法で魔力の一部を振り落とすことにより、積み木で重ねられた塔と言う名の魔法を崩したのだ。（ジェンガのような物を想像すると解りやすい。）

そして感じた違和感。

普通、攻撃で消える際は魔力毎消滅するかあるいは別の魔力攻撃に巻き込まれる。

しかし、一部の積み木（魔力）が一定量に振り払われたという違和感があつたことで、エリスの現在の見解に至つたのだ。

淡々とエリスは語った

「ですが、私は気付かない振りをした。じゃなければ負けていましたから。」「……？」

まるでエリスの勝ちが必然だつたような物言いに、月夜は首を傾げようとするが、動くことを許されない。ただ、その眼差しは疑問に満ちているかのようだつた。

「私の勝因は只一つ、『貴女の能力』そのものです。」

「私の……？」

「そう、魔術特化した私と補助魔法を駆使した私の速度、そして呆気なく破られた接近能力。」

「貴女は恐らく、相手は接近戦も歯が立たない、遠距離しか選択肢しかが無いと踏んで勝ちを確信していた筈。」

エリスは淡々と語った。

感覚的にも合理的にも納得のいく判断を的確にならべ

「そして私が貴女の能力に気付いた時、勝ちを確信しましたわ。」

「そう、私があの巨大な竜巻を発生した時、貴女は私が能力に気付いてないと悟ったのではありませんか？」

「……まさか。」

月夜の思考の中で此までの記憶と、視界が霞んだ瞬間が繋がった。

「私があの竜巻を発生したのは、攻撃の為じゃない……単純に砂や砂利が欲しかつただけなんですよ。」

エリスは竜巻が破られることを予見していた。

竜巻は決め手じゃなくて決め手に入る前の『下準備』

竜巻の強風を使い、砂をかき集めその砂を破られた後の風弾に込め、そして風刃刀を形成した後。

本番の一か罰かの賭、一瞬の不意を作ろうとした。

こんな偶然的な事をエリスはやってのけたのだが、此を100パーセントと言い切る理由はただ一つ

「貴女が不意を作ったのは貴女自身のもの、自分自身の能力に過信し尚も風弾を斬り続けた事が何よりの勝因だわ」

「……負けたわ。」

月夜は知った。

あの戦闘の中で此ほどの思考を巡らせ、そして偶発的でも筋の通つた駆け引きに出るエリスの戦術性を。

技術を猛威に単調的に振るつた月夜とは歴然の差、完全な敗北だ。

第五話『人為的魔力暴走』K

「守れなかつた……。」

エリスの風刃刀があるのにも関わらず、その場で月夜は俯いた。

「流石だよ……エリスちゃん。あたしなんかじや到底叶いつこ無い。

「……それよりも、」

「結局、守れなかつたよ……。」

頬を伝つて流れたのは一筋の涙がエリスの言葉を遮つた。
何故か月夜は悲しげな表情を浮かべて、

「守れなかつた……？」

「うん……当然でしょ。この学校をさ。」

「え？」

訝しげに生徒会長を見据えた瞬間、異様な魔力の気配が体育館の方
角から漂つ

「あれは……？」

「やばい始まるわ。暴発魔術式。」

「まさか、暴発魔術式だったの！？」

人が認知出来ない魔力を無理矢理暴発させるという魔術式。別名『人為的魔力暴発術式』と呼ばれている。

本来、人は魔術書や幾度の鍛錬を行つて己自身の魔力に気づき魔術を形成するのが基本だが。

この魔術式は人為的に魔力を行使させ他の魔力を刺激し、魔力を認知出来ない人間を無理矢理気づかせ魔力を暴発させることが出来る。

数十年前、魔術組織の間でこのような方法で魔術師を生み出す計画があつた。

しかし、魔力を認知できない魔力耐性の無い人間が無理矢理気づかされると、自分自身の魔力を制御出来ない状態に陥る。

故に、魔力による暴発や魔力に支配される状態になる為、魔術協定の間では使用されたら重い罪に問われる禁断魔術と認定された。

しかし、異界人はこの禁断魔法をリスクを利用し、無実の人々を暴発させ魔術組織に攻撃を仕掛けていた様だ。

「もう15分も満たないわ……。」

「あそこには海斗が居るけど……あいつだけじゃ無茶よ。」

「青葉君も……？！ どうして…？」

「この一件を止める為に彼も協力してるのよ。」「じゃあ私たちは……」

「同じ”勘違い”をしてたみたいね……！…！」

憤りを感じた、まさか互いに敵だと勘違いしていたとは。

エリスの不覚。月夜の周りに張り巡らされた魔術式を解いて体育館ほうへ走り出す。

彼女が何者なのかはまだ知らないが、敵ではないと察知したためだ。詳しい話は、またこの件が解決したら。

それよりも魔術式の完成まであと15分も満たない。刻一刻と時間が迫る中、体育館の方では不穏な空気が流れていた。

五話 END

第五話『人為的魔力暴走』K（後書き）

まだ暴発魔術事件は終わっていませんが五話はこの辺で終了し、続きは六話に引き継ぎたい思います。

何度も区切りが多くて申し訳ないです。

前記にも説明したとおり機種的（使用しているのがPCでは無くPS3の為）な都合で900文字くらいまでしか書けないんですね（PS3の仕様で）。

まあ投稿回数多ければ良いだろうと思ったのですが、流石にそれだと一話一話が無駄に多くなるので

今後の投稿は5000文字くらいの文字数で投稿できる携帯電話を使つていきたいと思います。

そのため投稿期間は前よりもかかる可能性が御座いますが、出来るだけ早めに更新するよう作者も精一杯頑張らせていただきます。

第六話「田覚め」A（前書き）

携帯投稿です！

第六話「田覚め」A

中に入った瞬間はここが当たりなんだろ？と、青葉海斗は思つ。ホールの中央に佇む、黒い本肉眼で表紙を確認する事は難しいが、その周りから黒いミスト状で煙に近い、『何か』が広がつていると解れば話は別だ。

これがエリスが説明した黒く異様な力を纏つた魔術書だと、認識するのにはあまり時間が掛からなかつた。

「何、見てるん？」

海斗が違和感を認識しても、氷川淳教員は田の前の光景を認識して無かつた。

「お前には見えないのか？！」

「ハハハ、何だよ、その厨一臭い予兆はよお。」

氷川は小馬鹿にしたように笑つてゐる。

気がついていない、黒い魔力は体育館を溢れ出すばかりに増殖していくのに。

これまで複数の魔力発生によつて桁外れに増殖してい、これほど悍ましいのを田の当たりにして果たして害の無い魔法とい切れるのだろうか。

海斗は深い闇の中に力強く瞳を細めた。

微かに見える小さな影、それが魔術書だと呟つ確信を持ちながら。

「ぐう……ぐう！？」

「氷川……。先生が厨二だと洒落にならないぞ。ふざけないでくれ。」

頭を抱えるように氷川はしゃがみ込んだ。

それをタイミングの良い演出と海シは思い込んでいたが、頭から黒い霧状の物が纏わり付くと解れば話は別だった。

氷川の眼光が鋭かつた、狼のような獸のようなそれを抑えようとする氷川の理性が、
たつた一つの頭の中で複数の声が搔き交ざり、途切れ途切れの中途半端な悲鳴が響き渡る。

「氷川」
。」

一ヶウウー！

「おいおい……まじかよ

氷川の周りから赤い蒸気が魔力が。

海斗は遠ざか、ひりひりと一歩一歩下がるが

「（何故、氷川だけ……。）」

「（しかし、逆を考えれば此はチャンスなんかじゃないのか？）」

海斗の双眸が隈なく辺りを見渡した。氷川だけ可笑しい理由なんて今はどうでも良いと。 体育館は闇に包まれて、目を凝らしてもヒント所か何も見つからない。

もがく氷川に目線が変わる、腰に添えられた何の変わりがない円筒状の物。つまり懐中電灯。

闇の空間を切り開く唯一の光を見つけ、思考より先に静かな足取りで氷川に近づいた。

「ウオオオオオオオオオオ！」

もはや、そこに海斗が知っている氷川は居ない。雄叫びが強く上がり、海斗を振り払うように拳を振り回して。

「（武術を嗜んでる奴の拳なんて喰らって堪るか。）

伸びた手を咄嗟に引き戻して、反射的に地面を逆に蹴つて下がり、

数メートル程の間合いを取る。

闇に包まれていると言つても霧状で幸いに氷川の胸元の懷中電灯は付け放しの為、問題は無かつた。

そして豪快に奮った氷川の拳を見据える。

あんなのを直に喰らえばノックダウン、そんな事は海斗にだつて解つている。だから動く際も平静で慎重だつた。

「え、ちよ?...」

が、そこで暴走した氷川の視線が海斗へ移る。紅い蒸氣が何かを捉えんばかりに揺らめいている。氷川は太股を上げ、大袈裟な地響きを鳴らりそつと地面を踏み付けると、氷川を中心に紅い衝撃が津波のよつに進んだ。

「（なんなんだよ……あれ。もしかして魔法なのか?）」

氷川が使えるのは有り得ない、と。

しかし、海斗の方まで近づくと衝撃は下半身を埋め尽くす程、正に津波のように徐々に大きさが広がる。

「（これじゃ……迂闊に魔術書に近づけないぞ。）」

魔術書接近時に発生するかもしれない、不祥事に備え、
懐中電灯を装備するという田論みが、裏目に出てしまった。

後退すれば徐々に大きくなり、やがて避けられなくなる。

津波に海斗は突き進んだ。自慢の運動神経で脚を俊敏に動かし、爪先で地面を弾いて跳躍。

ハーダル感覚で津波を飛び越える。

数秒したら、響きやすい場所のせいなのか、耳障りな粉碎音が響く。これほどの衝撃を出す氷川が魔法を駆使していると、ようやく認めた。

海斗は苦虫を噛むように顔を引き攣らせた。

「グアアアアア！」

悲鳴と共に紅い魔力が溢れ出る。

海斗は眉を潜めながら深呼吸をする。

これだけの破壊力を持つ氷川をどう止めるのか、策が見当たらない。突進してもムエタイや空手で鍛えられた武術が待ち構えていて、逆に離れても津波の衝撃で取り返しの付かない事になる。

只止める方法は一つ
だけ

「（氷川を止める方法は一つだけ……、魔術を解く事くらいか……。）

「（だが、どうやって止める……？　俺はエリスのようだ魔術には詳しくないし……。）

止め方はある筈だと海斗は思考を回した。

エリス・フォン・シュトレーザ、並びに生徒会長・月夜流香は手詰まっている。

体育館の周りにそびえ立つ異様な魔力に、
その付近から魔力暴発の『前兆』に影響を受けた警備員に苦戦を強
いられていたのだ。

「ふつ！しかし、貴女が『日本政府』に派遣されてきた工作員で
したとはね……」

「はつ！……飽くまで、私はこの学校や町を守りたいから協力して
ただけだよ。だから直接派遣された訳じゃ無いし、そもそも政府の
ような汚い連中なんかに属したくもない。けれども、政府が私には
無い情報を提供してくれるからやむを得なかつただけよ。」

生徒会長の刃が警備員を捉える。

前足を踏み込み自分が握り絞めた刃を相手の腹部に食い込ませ、警
備員は数メートル先へ吹き飛んだ。

しかし、

「まだ戦えるの！？」

「やはり、脳ではなくて魔力に支配されてるから死ぬまで無理そうね。」

月夜は深いため息を吐きながら。

そう、警備員の攻撃を弾き返しては弱い部位を狙ってきたが倒れな
い。

魔力に支配されているせいで死ぬまで動き続ける、正に操り人形。
生徒会長の魔力切断も結局は根源の人を斬らなければならぬ為、使
う意味がない。

魔力消耗で力が発揮しないエリスと、術を制限された生徒会長。
無論、二人の頭の中に「殺し」と言う選択肢は視野にない。
それが異能を持つ魔術師のルールにして、誇りなのだから。
しかし、それじゃキリが無いのもまた事実。

「はあ……はあ……、これじゃキリが無いわ。生徒会長……体育館
周辺の魔力切断はどうですか？」

「駄目よっ！！ 魔力本体が内部にあつて斬れない！！ このまま
だと魔力暴走しちゃうよ！！」

「別の策が無いかしら……。」

斬つても斬つても、別の魔力が出現して突破には無理が在る。

どうしよう、と困り果てた面持ちで、縦横に体を脚を動かしながら警備員の魔力の余波を避け続けた。

体育館は田と鼻の先なのに、行く手を阻む警備員と周りを覆う魔術結界。

あの時、彼女が敵じゃないと見抜いていれば、こんな事には為らなかつたかもしれない、エリスは奥歯を噛み締めた。

タイムリミットは10分、それでもエリス達は諦めず、極限にまで身体を動かし打開策を思考した。

「（異界人による魔術式なら……いや、尚更だ。）」

思考しても浮かび上がらない、吠てる氷川がそれを遮つて居るのか否か。

やはり、氷川の攻撃は続く。体中から紅黒く滲み出る物、体の一倍は越える強大な弾が更に広がりつつある。

「おいおい……氷川、あんたは一体何なんだよ。」

思考を完全に遮る威圧。

体育館の天井を突き抜ける程に黒い霧を吹き払いながら、膨れ上がりついている。

身体能力なんかの問題ではない、単純に死を裏付ける圧倒差。海斗は恐れた。目を大きく見開き、足を震わせながら後退りした。

「ぐつ……クソがつ……じ、冗談じゃねえよ、これじゃ体育館が吹つ飛ぶじゃねーか！？」

在るだけで鳴り響く轟音が体育館中を支配する。強大な魔力から磁破のように吹き荒れて威圧が発生。

「があ！」

ほんの一瞬、気が付かなかつた。海斗の腹部に打ち上げられたような衝撃が走つている。

これまで経験した事がない痛み。

腹部から全体的に伝わり、その勢いは止まらず、数メートル先へ叩き付けられた。

深い闇の中へ海斗の体が複数回、転がる。

複数に重ねた防寒着も難無く破かれ、それだけでは儘ならず、口からは鉄の味が広がる。

呼吸は不規則に乱れたまま、詰まつたように途切れ途切れだ。

立ち上がりれない……動く度に今それ以上の痛烈が全身に響いて、

「めツ、めツ……をツガツ！」

目を覚ませ氷川！！

そう言いたかったのに、痛みがそれを遮る。

魔力の余波だけで、これだけの痛み。前へ進もうとすれば木つ端微塵にもなりかねないだろう。

前へ進んでも、後ろに進んでも地獄。唯一の方法はまだ完成していない魔術式を事前に解除する事。

恐怖に突かれた海斗の背中、思考を焦るよじに回すと、

黒い魔力の霧が晴れていいくと同時に、轟音が近付いた。

「こ」の若造がこれだけの魔力を保有するとは……これは思わぬ収穫だ。」「

海斗は目を凝らした。あの強大な魔力を片手で持ち上げ、接近してきているのは確かに氷川だ。

しかし、海斗が聞いた声は全くの別人。渋くて以下にも威厳のありそうな老人の声がして、

「術式が完成すれば数万もの身体が我が手中に……」

「ひ……かわ……！？」

息が多少整つた所で、海斗は床に伏せたまま氷川を見上げた。

「お前が現界の魔術師……。それにしても随分と軟弱そうな奴だな。」

「誰……なんだよ……てめえ……。」

氷川の口元が大きく歪んでいた。狂喜に満ちた表情、氷川の面影は何処にもない。

海斗は力強く睨み付けた

「！」の男は、氷川淳という名前……だったな。」

「違う……！　あんたは氷川じゃない！」

「ククク……事実だ。後、5分……後5分で、この男は私になるのだから。」

「どういつ……事だ？」

後5分と、氷川だった男は言つたので、海斗の思考が回りはじめる。時間が後5分、魔術式は完全に完成してない事と関連性があるのは確かだろつ。ならこの男は何なんだ。しかし、魔術式の解除をすれば、話は解決するところまでは解る。足搔くように海斗は立ち上がった。

「小僧、この魔力を目の前にして、まだ抗おうとするか。」

「つるせえ……。氷川如きの魔力に俺がやられるかよ。」

強大な球体が海斗の方へ向く、紅く黒く混在された魔力を集約する氷川の片手。

魔術式の解除方法を探れと、思考が回り続ける。

「（もしかして……？）」

不意に海斗の視界に黒く異様に包まれた魔法陣が展開された魔術書が映る。

エリスは三次元型魔術式を複数の魔術式を合わせた上で完成出来る高度な術式と言っていた。

なら、三次元魔術が完成してない現在はこの体育館で展開された一つの魔術式は完成していない事になる。

黒い魔術を中心に魔術式が展開され、その位置に重要性があるのなら

「そうか……。なら手始めにその言葉を使つた事、後悔させてやろう！！」

「（しまつ……）」

その時、氷川だった男は膨大な魔力を海斗へ飛ばして、視界には紅いと滲み出た黒しか広がらない。

氷川の桁外れの魔力とそれを掌握し強大な術式を披露した謎の存在

の黒い魔力が混じり合っている。

海斗は只、手を伸ばした。足搔こうとそれでも助かるうと、強大な力を前にして救いの手を求めるかのように

轟ツー！ と木片と白い蒸気が辺りを包み込んだ。

そこに唯一佇むのは氷川の身体を掌握した謎の存在。

「ハア……ハア……。そんな嘘でしょ？！」

蒸気を払うように甲高い女性の声が響いた。

ようやくたどり着いたエリス・フォン・シュトレーゼと月夜流歌。先の戦いで体力を消費したのか、息を切らしながら状況を見据え

しかし体育館の強大な魔力を感知すれば血相を変えて唯一佇む人影の背後へ迫る。

「また、現界の魔術師か……。」

霧を振り払い、氷川は背後へ振り返った。

「貴方は氷川淳……いえ、その声は違いますわね。」

「魔力暴発を駆使して氷川先生の身体に乗り込んでいるみたいだけど。」

異様に放出される魔力、エリスでもあまり見た事の無い強大な魔力を見て驚愕の面持ちで氷川の身体を見据えた。

「一般人にしては桁外れの魔力……こいつ本当に一般人なの？」

第六話『田覚め』B

「それよりも、どうやって我が魔術結界を抜け出した……。お前達は我が駒に躍らされていた筈だが。」

氷川には似合わない威厳が響く。

不可思議な表情を浮かばんばかりに疑問に満ちている。

魔力の本体は内部にあり魔力切断では斬れない筈、更には死ぬまで動き続ける駒に対して、

どのような策を巡らせたのか気になつて仕方ないと、男は続けて思つた。

「警備員は動けないよう束縛しだけだわ、あの程度の魔力余波なら突破出来ないから低レベルの束縛術を駆使してね。」

「魔術結界も同様よ……本体が内部から発生して斬れないなら潜り抜ければ良いだけの話。」

エリスは淡々と語る。そもそも結界の本質とは封じ込め、または発生した領地内に特殊な影響を及ぼし、外部からの影響を防ぐ物として存在しているが。

特に最後の外部からの影響を防ぐ前提があると、四方向の出入口を第一に強化すると言つ性質があるため、

一番奇襲されにくい地中は基本的に魔力の流れが単調的で強度が弱い傾向にあるため、

エリス達は地中からその中でも弱い部分を攻めて、突破したのだ。

「魔術師風情が。知恵を振り絞つたか。」

「褒め言葉として受け取らせて頂くわ。しかし、貴方も人の事は言えない」

「その魔力に貴方の魔術式。私はそれに、見覚えがあるんだけど、もしそうなら貴方は魔術師以前に『実体』が存在しないんじゃないのかしら。」

エリスは訝しげに見る。男は堂々と見下したような眼差しを向けて笑う。

「何故、そう思う？」

「少なくとも氷川教員を操つてる所からよ。警備員を思い通りに操作し自身の魔力を混在してくる所からして、貴方の魔術は魔力暴発した人間の魔力を干渉する魔力干渉能力。」

魔力を干渉し自分の意志も植え付ける事が可能な魔術。

他者の魔術に干渉し人為的に魔力暴走を起こす事も出来るが、それでも制御している魔術師相手には中々効かない、戦闘でも補助的な役割をしない物だが。

「そして、理解室で見た魔力性質と、氷川教員に纏わり付いてるそれが同一の魔力性質なのよ。

恐らく貴方は魔力の込めやすい魔術書に魔力干渉能力を駆使したんでしょう。」

エリスの見解はこうだ。

今回の事件の真犯人は実体がない。魔術書に宿つた人間の魔力意志による犯行なんだと。

そうすることで感知されても高い確率で三次元術式の完成を物に出来ると。

生徒会長が事前に察知し、食い止める事が出来なかつたのも説明が付く。

本来なら、人間が魔術を繰り広げるのは目立つ上に気配も発生する為、高確率で発見出来る筈だ。

しかし、魔術を練つたのは魔術書であるなら話は別。

本来、魔術書と言うのは読んで字の如く魔術を印した物であり、本体が魔術を唱える物では無い。

しかし、魔術書には魔力の文字で書かれている為、先の魔力干渉術を込めやすい性質がある。

実際、謎の存在はこの性質を利用して魔術式を転移させながら術式を発動していた。

そこまでする需要は現に証明されている。流石の月夜も感づかなかつた事。

魔術干渉能力は稀に聞く能力な上に、本来魔力とは人が展開する物なので、

これまで魔術書が転移し練つていた事は視野に含まれないからだ。
そして魔法切斷を駆使しても本を中心には発生した魔術であるなら、本を切斷しない限り無効に出来ない。
魔術書に転移魔法が備わっているなら捉えにくく上に気づいたとしても、見つかりにくい。

「貴方は自分自身の全ての魔力、魂までも本に移し元の肉体から離れ、魔力人格として今回の計画を実行した。違うかしら？」

氷川に纏わり付く、黒い異質こそが声の正体。エリスは双眸の碧眼を頭上の魔力へ向けた。

あれだけの魔術式を展開するのだから幾ら有能な魔術師でも、自分の魔力を全て注ぎこまなければ可能にならないケースだつたらだ。

男は高らかに笑い始める。氷川の顔を使って歪み過ぎた笑みを浮かべながら

「ククク……以下にも。我に肉体は存在しない。故に我は意志を持つた不死の支配者にして救世主。名はメシアとでも名乗つておこうか。」

黒い蒸気が濃厚に浮かび、メシアと名乗る存在は返答した。

「魔力暴発を起こして、一二万の人間を巻き込むのが救世主なのがしら。」

「これも全て貴様等現界勢力に対抗する為の武力強化手段の一つだ。この計画は飽くまで最初の段階に過ぎない。一二万人の人間を掌握し軍勢を蓄える為の一つの方法」

「この魔術式が完成されれば我は一万の人間を更に増やし最強の軍勢を作り上げ支配者として現界に君臨する。それが下界勢が我に与えた使命であり、我が果たすべき確定された運命なのだから。」

氷川の右手を豪快に広げ、慢心そうな声で支配者は語る。
それに対してエリスは案外詰まらなそうな表情を浮かべ、時間が迫
つてていると言う事で、

手短かに事を済ませたいと言つ考えしか浮かばなかつた。

「フフフ。随分と大袈裟にほざくわね……。術式を此処まで感づか
れずに仕上げたのは褒めて上げるけど、貴方は組織にただ利用され
てるだけよ。」

エリスは一蹴、相手の人格を小馬鹿にしながら鼻に掛かつたような
声で笑うが、
相手は逆に鼻で笑い飛ばすように、全くの食いつきすら無かつた。

「青葉君は　？」

すると、魔力の霧の中で一人そわそわしながら、生徒会長・月夜は
海斗が居ないか辺りを見回した。

その言葉にエリスも気づかされたのか、瞬間的に首を振り回すも、
景色から一つも人影が見えない事で訝しげに力強く目を凝らしめた。

「あの馬鹿……もしかして。」

魔力が氾濫したと言う事実を思い返し、二人は驚きよりも先に不安
な悲しげな表情に見舞われた。

信じているのに、同時に不安を感じて、そんな矛盾が攻めぎ合つて
る中でも、

目の前の光景を見てしまえばエリスはメシア基、氷川の顔をただ、
睨み付けた。

「あの餓鬼の事か……。私が木つ端微塵にしてくれたわ。」
「か……いと！？」

木つ端微塵、エリスの表情は呆然だつた。
予想はしていたのに、覚悟もしていたのに、

彼女の心の中で溜め込んでいた不安や恐れが、たつた一言で。
やがてエリスの視界が紅く昇る程、氷川の顔ばかりを見据え。
憎しみ、怒りが沸き上がる。氷川には申し訳無いがあの顔を見る度
にボルテージは高まつていつた。

そして

「許しませんわよ……。」

それだけだつた。

きわめて冷淡に吐き零し、身体中から蒼く透き通つた揺らめきを全
体に広げていく。

怒りと共に現れたエリスの魔力、

月夜の戦闘で使われた魔力消費が些細な物と思わせる程の桁外れの
量。

怒りや憎しみの強い感情が魔力上昇を無理矢理促進させ、また消費した魔力を尽き切れない感情を材料に無理矢理作りあげる。

この方法を月夜は少なからず知つていて、今現在恐れんばかりに後退りする。

極めてリスクの高い試みだ。魔力は感情に反映されやすく、意志や感情とは時に奇跡を生む力とまで言われている。

しかし、私怨や憎しみ事でそれを用いてしまうと人は感情を爆発させる傾向があり、

また魔力も爆発という所まで反映し、

結果、幾ら魔術師でも感情を抑えられなければ、魔力暴発と同じよう魔力に支配される。

それを百も承知でやつてているのかと、訝しげに生徒会長は思つ。

「クフフ……強大だ。しかし、我には及ばない事を見せ付けてやろう。」

エリスがどれだけ憎んでいるのか、自身が憎まれているのか解つてゐる筈にも、感情に左右されない魔術のプロと言つものはただ狂喜に満ちて笑つている。

沈黙は続き、魔力による対立は続いている。体育館という隅から隅まで30メートルはある空間全てには、氷川という桁外れの魔力を保有した肉体を支配した魔力人格と、ただ海斗が死んだという事実を悟り、怒りに満ち溢れた危険な魔術師との

魔力の対立だけが空間を埋め尽くしていた。

「（そんな事言つてゐる場合ぢやない。）」

生徒会長・月夜はこの対峙から距離を置く。

エリスには視野が無いだろうと彼女は思う『魔術式の解除』

その課せられた使命を遂げられるのは私 只一人なのだろう、と。
何より、止めなければ男の言う通り一万名の町の人達が魔力暴落し

軍勢にされる。

一緒に笑つた友達も、少し頭の良い後輩も、只、軍勢を作り世界を支配すると言わんばかりの壮大なエゴを理由に死ぬまで手駒にされるのなら、これはあまりにも酷い事実だと、月夜は動かなければならなかつた。

時間が後一分程とまで迫られていたら尚更の事、

月夜は静かな足取りを聴き、急いで前へ進むが、焦ってはかりながら、多少の足音が目だつてゐる。

そこでメシアの紅い黒い魔力とエリスの蒼い魔力の衝突。空間が悲鳴を上げるような甲高い音響を奏でる。

「（ツ！？）」

擦り合うように熾烈な衝突が広がり、衝突から生まれた衝撃波は月夜を含めた外部を大きく巻き込む。月夜は刹那の如く、刀身をあらゆる方向に的確に振り回し障害になる衝撃波を消滅。

しかし、衝突際に発生される衝撃波は次から次へと現れ、迂闊に近付く事は出来ない。

タイムリミットは刻々と迫る。衝突はまだ続き、エリスの感情は炸裂している。

「ククク……力押しで魔術式を木つ端微塵にするつもりだろうが……足らんな！！ 足りなすぎるゾオオオオオオオオオオーーー！」

メシアの両手から轟ッと数倍の音が鳴り、魔力の勢いは累乗されたような勢いで増していく。

対立の境界線で保たれていた、魔力と魔力のぶつかり合いにエリスは押されていた。

奥歯を噛み締めながら足を地面に食い込ませ、まだ衝突を維持しようと諦めずに踏ん張る。

しかし、先の戦いで魔力、体力を消費したせいなのか、メシアの魔力が徐々に迫っていく。

そして

「まだ……まだよオオオオオオオ……お？」

足搔いたエリスの声が異様に響いたのには理由があった。

魔力の霧は消えていて、月夜に降り懸かる衝撃は消えていて、

エリスの魔力は消え、何よりもメシアが掌握した氷川の魔力も消えていたのだ。

「ぐ、ぐあああ！ どういう事だ！？」

そしてメシアの膨大な闇が削れるように減り続け、苦言と同時に驚愕の声を表した。

そして掌握していた筈の氷川の身体が横になっている。

エリスも力が抜けたようにひざまづいた。メシア同様、どういう事なのと、怪訝な眼でその先の一つの人影を見据えて。

「全く 氷川と言いエリスと言い魔法諸事情なんてもううんざりだ。」「え……？ 何であなたが生きてるのよー！？」

消えた筈なのに、とエリスは困惑した表情で魔術書を片手に足を引きずらしながら近付く男を見た。

それは紛れも無く青葉海斗の姿。

「何で死んだ事になつてるんだよ……。」

苦く口元が歪むと、倒れた氷川の上を漂い苦しみ続ける魔力を見据える。

「魔術式が解除されただと……！？ 防御術は張った筈なのに……。
な、何故だ！？ 何故！？」

「言つただろ？ 氷川如きなんかにやられる訳ねーだろつて。」

魔術解除は容易な事、と海斗は思い返す。

魔術式が魔術書を中心に行開され、三次元魔術式が特定の位置に術式を描いて成り立つ物なら、中心である魔術書の位置をずらせば魔術展開は無効に出来ると、あの後、海斗は近くの魔術書に手を伸ばし位置をずらしていたのだ。

しかし、それでもと、メシアの疑問は絶えない。

「何故！？ あれだけの力を受けて！？ 何故！？ 魔術書に張り巡らせた結界を突破出来た！？」

「はあ……。何故何故何故つてうるさいな。こつちも知りたいくら
いだ。」

海斗は思い詰めたように深いため息を吐いた。

海斗自身でも自分の身に何が起きたか理解してない、魔力が暴発する訳でも無く魔法に目覚めた事でもない。

しかし、あの時海斗に降り注いだ魔力は間違いなく

「只、間違い無く言つならあの時、俺はあれほど魔力を全て喰らつたといつことだ。」

「何だと……？」

紅い魔力が滲み出でる。まるで喰らつた力が漏れるように。メシアの動搖の声。

魔術書の周りには人が近づけないよう防御結界を張り巡らせていた。

後数分、完全に完成を見通していたと言つのに、相手が魔力を食らいつくしただと、そんな術式聞いた事無いし有り得る物か。しかし、現に海斗は生きていて術式は解除されている。

だからこそメシアの思考は焦り無意識の現実逃避をしていた。

追い詰められた状況、その末にメシアが思い浮かんだのは、極めて単純な物だった。

「おのれおのれおのれエエエエ！」

形も無くなり追い詰められた黒い蒸氣メシアが眼にも止まらぬで速さで海斗に接近する。

狂乱、合理的思考を全て捨て、ただ全てを台無しにした海斗を殺す事しか頭に浮かんでなかつた。

海斗は速さについていけず不意を突かれたように態勢を崩すと、

「せめて、貴様は此処で殺してやるゥウウウウ！」

狂気に満ちた闇が最後の言葉を紡いだ直後。
それを遮る風の音。

その時、一閃の光がメシアだつた闇を両断していた。

悲鳴と共にあれ程まで圧倒的だつた魔力が呆氣なく消え去ると、海斗の前に現れ、このは紛れも無く生徒会長の用意だつた。

「青葉君！ 大丈夫？」
「え、生徒会長……？」
どうして……。
」

海斗は困惑する。

「ちょっと込み入った事があつてね……私もエリスちゃんと近い立場の人間」

「何で、じやないわよ！？」
「いいえ、お聞かたいたわよ。」
「うこうう事よー？」

そこで乱入してきたエリスは顔を真っ赤にし眉を引き攣らせながら言つた。

心配かけないでよね、と心の中で一言。

「本当にわからねえんだよ……。ただ、氷川の魔力が俺の両手に吸い込まれて……。」

「吸い込まれて……どう言つてことなの？」

猛烈な速度で魔力を吸い込んでいた光景が蘇る。

強大な魔力が迫る時、苦し紛れに伸ばした海斗の両手が攻撃を防ぐだけじゃなく魔力を吸い込んでいたという事。

どういうプロセスで原理で発生したかは、エリスにも海斗にも解らなかつた。

「いや……解らない。正直、俺は今までこんな力が使えるとは思わなかつたんだ。魔術や才能にも恵まれない普通の生活を過ごそうと思つたばかりでな……。」

「しかし、現に貴方は魔力暴発を起こさなかつたし、あの馬鹿げた魔力から生き延びたと言う異例の力を秘めてるわ。」

「異例の力……それが何なのか、自分で解らない。」

そうじうじてる内に、海斗は木片ばかりが飛び散る体育館を見回した。

その中央で横たわる氷川は何事も無かつたかのように鼾を欠いている。

「それにしても氷川は……化け物だつたな

「エリスちゃんでも圧倒されるくらいの魔力だもんね」

「あの男は猿の生態形の話についても、この件についてもつくづく

謎だわ

海斗はズルズルと、足を引きずりながら飛び散った木片へと近付く。

ふう……と溜息を吐いてようやく終わつたんだと実感しても、目の前の惨状のせいなのか二万もの人間の魔力暴発を阻止したという実感は湧かなかつた。

「此、どうするんだ？」

それよりも、先に荒れ果てた体育館の今後について海斗は気になつている。

月夜は頬杖をつきながら、

「これだけの惨事なら政府の隠蔽術式でも使つちやうか！」

月夜は閃いたように明るい表情で、刀を地面に向けた。
平面な地面に彫刻を刻んでいき異形を描くと、構えるよつて目を伏せてこう唱える。

「汝、我的契約の下に召されよ。」

と言つた後に水滴を故意に零すよつて、些細な縁の魔力を陳に放出

すると煙が舞つた。当然、魔法諸事情に慣れない海斗はそれが何なのか解らず、

「ゲホゲホと咳ばらいしながら田を細めた。

煙が晴れた直後に現れたのは百八十センチメートル以上はある背丈に、

黒いビジネススーツに包まれた紅い短髪、黄色い瞳をした引き締まつた体格の男。

それが気障に微笑むと、呼び寄せた月夜に低い姿勢で近付いて彼女の右手を前に優しく掴みだせば人差し指に唇を付けて、

「フツ俺を呼んだかい？ ハニー」

「だあーかあらあ！！ ハニーは止めて！！」

「ベシッ」と、月夜の平手が男の頬に心地の良い音を響かせた所。

それでも男は気障に微笑んで、エリスは背筋を凍らせたように後退りする。

「フツ。ツンデレハニーも素敵だぜ。ところで、用件はなんだい？ やつぱり夜一人だと淋しいのかい？」

「違うに決まってるでしょうが！！ あれよあれ、見ての通り随分と荒れたから修復して欲しいの」

恥ずかしさ故に微かに頬を紅く染めながら月夜は地だんだを踏むと、優しげに微笑んだスーツ男は何を勘違いしたのか。

「安心したまえ、幾らハニーが乱暴でも、俺とハニーの関係は紅い糸で結ばれてるか……」

「そつちの修復じゃないのー！」
「体育館修復をしてよー！」

「フフフ……シンシンハニーも堪らないなあ。よし、私は『始

「フォートレス』が貴女の期待に応えて差し上げましょ。」

パチン、と指を鳴らすと、散らかっていた木片が移動し惨状だった
体育館が、みるみる内に修復されていく。

「すげえ……。」

「流石、日本政府の始末人。情報隠蔽時に使われる修復魔法は私より器用みたいだわ。」

「は？ 日本政府？」

あら、貴方知らないの？ 田本政府は自衛隊しか保有してないけ

海斗は目を丸くしながら首を傾げた。

自分の力と言い、異界人と言い日本政府。

まだまだ魔法諸事情は当分抜け出せそうに無かつたと、海斗は心の中で溜息を吐いた。

第六話『田代の』B（後書き）

六話は終了です。次話へ続きます。

事件で多くの損害があつたにも関わらず、その日の朝は相変わらず平穏が続いていた。

無数の学校生徒と複数のサラリーマンによる朝の通勤ラッシュが何もないアスファルトを埋め尽くしていた。

「はあ……。」

それとは対象的に深く溜息を吐いた青葉海斗の足取りは沈んでいる。そしてふらついた様子で大袈裟に猫背の体を揺らして、4時間程前の惨状を思い浮かべるのだった。

「米国政府が現界の最高勢力ううウウウウ！？」

不意にエリスの言葉が蘇る。その時、海斗は畳然たる面持ちで、エリスを見ていた。

体育館が修復された直後、不意にエリスが「米国が魔術結社を統括してゐる」と言つてきたからだ。

「ええ、認知しるのは一部だけだね。けど厳密に武力だけならどこの異界よりも技術があるとは断言出来るわ。」

「随分と素敵な魔術勢力だな。それなら魔術世界が作れたというのに。」

「魔術的発展は今の所有り得ないわ。現在の状況や犯罪の激化を考えね。」

「ヒリスちゃんに続くけど、日本はその傘下の組織、けど魔術団体の武力は米国の軍隊に負けず劣らずだね。」

海斗が深く溜息を吐いた所、体育館の中央から大きな鼾声が聞こえる。

この惨事を一番ややこしくした張本人氷川淳教員の寝息、流石に起こせばまずいだろう。

以心伝心、三人は「クリと首を縦に振つて忍び足で進んだ。

「ハニー達、何やつてるんだい？」

事の状況を知らない、フォートレスは大きな声で呼び掛けるが。

慌てた月夜は小声で何かを紡いで

「（あんたは邪魔！）」

と、月夜の指がフォートレスに向けられた所で、彼の周りから煙が上がる。

召喚術の解除は至つて簡単だ。

ただ、任意で呼び出し追い出す事が出来る為、

此処で召喚されたフォートレスは月夜の任意で強制退出されたのだ。

「…………」なんて悲鳴の様な愁訴が聞こえてきたが、三人の静かな足取りはそれさえも跨ぐように忍んでいた。

「所であいつ一体はなんなんだ？」

学校の外、即ち帰り道を歩く月夜とエリス、海斗の三名。静寂ばかりが続く道中で海斗の声が異様に響いている。

「さつき説明した通りだよ。政府に遣わされた始末人、契約を結んだ相手だね」

「え、と雑に返事をする海斗。

「じゃあ、先輩は日本政府に雇われた魔術師なんですか？」
「厳密に言つと魔術師じゃないね」

魔術師じゃないと知れば、気になるように海斗は眉をひそめて、

「月夜家は彼の有名な剣豪・宮本武蔵の剣術を受け継いだ由緒正しい一族なのよ。私は一族の血を引いた人間」

「宮本武蔵……」

「宮本武蔵は歴史でも有名な剣豪だけど、人が知っているのとはちよつと違つた人物でね」

「多くの魔術を無力化させた『魔術斬り』を心得る魔術界でも有名な武士なのよ」

「歴史の教科書には載つてないですがね」

「魔術事情を表に出さない為に政府が情報統制したのよ」

海斗は訝しげに首を傾げた。

「つまり月夜一族は宮本武蔵の対魔力技術を受け継いだ魔法払いの一族と」

「本来なら、私達の一族は魔力斬りを応用して、

怨霊や妖怪を退治する一族だつたのだけれど神殺し事件以来からかしらね。

妖怪や怨霊、その手の原因が異界人による所業だと知つてからは一族の活動も変わり始めたのよ」

「即ち、異界人討伐……」

そう、と月夜は頷く。

話の内容を大体理解した所、海斗はエリスに視線を向ける。何か聞いたのか、その面持ちは黒く歪んでいる。

「なら、もう俺の助力は必要無いな。この手の問題に対してはプロが居るようだし……」

「必要大有りよ。」

しかし、海斗の背筋は凍る。

抜け出したいと巡らせた口実が脆くも崩れ、たつた一言で訴えが遮られたのだ。

「貴方の妙な力……あれは今まで見たこともない魔術だわ。もしかしたら、今後の役に立つかもしれない」

「あ、あの……。俺みたいな一般人がこれ以上の仕事をするのは流石に僭越ではありませんかね」

冷や汗をかきながら微笑む海斗には動搖がある。

「何を言つてるのよ。私の命を救つてこの町を救つたのは結果的に言つと貴方なのよ」

「やうだよ、青葉君。僭越なんて謙遜する事じやないんだよ！！もつちよつと自分に誇りを持ちなさい！！」

女性陣の視線が海斗にた集中した所、追い詰められた海斗はコクリと頷いた。

思惑は見事に失敗したと重い溜息をはきながら帰投。帰つた時は既に日が昇つていた。

そんなこんなで、夜から眠気を蓄積したまま朝のホームルームに切り替わる。

当然、青葉海斗は眠気を抑え切れず机に伏せているが、それでも顔色ひとつ変えないエリス・フォン・シュトレーゼの視線は一人の男に集中していた。

「ヘックショーン！ んーと出席を取るぞー。」

教壇に立つ氷川教員はくしゃみこそあるが、

昨晩の被害者だとは物語れない平然とした立ち振る舞いをしていた。あれだけの事件が起きても記憶は曖昧なまま風邪だけで済んだみたいだ。

この事は魔術師であるエリスも驚いてたようだが、。

しかし今、彼女の視界に居るのは氷川教員では無い。全く別の男、即ち男子生徒を凝視していた。

飽くまでも席が窓際の一番後ろに座る海斗の事ではない。

「神崎理多」

出席確認を取る氷川の目線とエリスの目線が交差した時だ。

交差点の席に座る男子生徒。

首に届くか届かないかの黒髪に睨まれたら思わず怯んでしまう程の目力がある黒い瞳を細めて

「はい」その男、神崎理多は低い声で返事をした。

エリスはクラスメートに関わらず、神崎との面識は無かつた。

彼の成績は上の中、記録場なら特別に優秀でも無いが、

退廷その位置は秀才と呼ばれる人間が占める位置に居る。

しかし、エリスの視線からはそれ以上の見解が物語っている。良くなれば褒めているのか、悪くなれば疑っているのか。

「神崎君が気になるの？」

不意に桜井愛海の声が響くと、時刻は丁度休み時間を指していた。凝視したせいで周りの状況を把握出来なかつたみたいだ。

ホームルーム終了の予鈴は鳴らない為か、間の抜けたような面持ちはすっかり忘れていた事を物語る。

「あ、あ、いや。」

「フフフ、気になるのね」

エリスが慌てるのには、神崎を凝視したのには理由がある。

「神崎とは関わらないほうが良いかもな。」

そこで現れた杉守連司の言葉を耳にして、桜井はエリスの理由について確信を持った。

「杉守君、あの噂信じてるの？」

あの噂とは、よくある噂の中でも異質な部類に該当する。

神崎理多に関わった数名の人間が行方不明になるという事例から発生した『行方不明事件関与説』の事。

「神崎の事だろ？ 信じてないさ。犯人なんているなら神崎以外に沢山いるしな」

「じゃあ、何でエリスちゃんに忠告なんてしたのよ？ 眼に力を入れる桜井に連司は苦笑いした。

「俺が忠告したのは、神崎に纏わる不可思議な噂の事じゃない。」

「なら、何？」

「神崎の『あれ』だ。」

「あれ？」

「そもそも、考へても見る。神崎の噂が流れる原因をさ。あいつはシビアな物言いから、周りからも近寄りがたい印象を持つているだろ」

「確かに威厳に近いような物はあるし、怖い印象はあるけど……けど、根はそんな人じゃないよ。」

「だが、噂と言うのはそんなもんだ。」

「……」

一人の会話は続いても、エリスは何も言ひ事は無かった。

昼休みになつてから、薄暗い廊下の道を神崎理多は歩き始めた。その後に続く足音が遅れるように聞こえる。そこに居たのは未だに眠気を蓄積させた青葉海斗とそれを無理矢理連れ回すエリス・フロン・シユトレーゼだつた。

「つたぐ、何で俺まで」

と、足音の次に青葉海斗は愁訴に呴いた。
眠気は続いたまま、エリスに無理矢理振り回され付き添いを強制されれば無理も無い。
それよりも何たる不幸だろうか。

「黙りなさい」

「あの事件解決直後だといふのに魔法諸事情はまだ終わらねえのかよ」

「学校生徒の行方不明事件はそれに並行して発生していたのよ。此らの情報を駆使して魔法説が浮上したら国民も動き出すし、何よりも異界人にとっては情報的な武器にもなるわ」

壁際から覗き込む訳でも無く理多から少し間の置いた距離でエリスは言った。

空間を司る風魔法を駆使して完全に気配を消している為、前の人間は愚か周りの人間までも気づいていない。

だからなのか、その立ち振る舞いは何処か堂々としている。

「それだと政府も情報統制も難しいみたいだし、事件の根源を掴み早急の処置を取る事が必要なよね」

「お前はどの勢力にも属さない単独の魔術師だと聞いたが、それだと政府の役人みたいな言い回しだ」

「魔術師が公になるのは私にとつても都合の悪い事なのよ」

「それで、神崎を付け回すと……」

海斗はため息を吐いた。

階段に登る理多の脚部を見上げながらその後を付けて

「一番手掛かりを持つてそうなのは、彼なのよ」

「手掛かりか。有力な情報を持つてている政府に雇われた生徒会長には聞いたのか？」

「貴方は馬鹿ね……。生徒会長も困つてるからひじてるんでしょうが」

エリスは呆れたように首を左右に振った。

そこで冷たい風が肌に伝う、尾行を続けて数分が過ぎた頃だ。曇りの天気に覆われた屋上に立ち止まる二人の追跡者。

その景色の先に標的と思わしい人影は見当たらなかつた。

「居ない……？」

氣配消去魔法により堂々としていたエリスの立ち振る舞いが、不可思議に首を傾げた。咄嗟に警戒態勢へ切り替え辺りを見渡した。

「追跡者か」

低い声に二人は背筋を凍らせた。
エリスの頭に突き付けた金属物、黒光りする銃口を向けて男は言った。

「神崎理多……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8755j/>

僕と魔術師と究極者

2011年10月6日18時20分発行